

「琉球文学」資料注釈4 『浮縄雅文集』下

島村幸一・小此木敏明・屋良健一郎

〈凡例〉

・〈本文〉は、沖縄県立図書館東恩納文庫所蔵『浮縄雅文集』を底本にしている。ただし、文集の冒頭にある「雨夜物語」は、既に「琉球文学」資料注釈2『雨夜物語』『永峯和文』で取り上げており、省略している。したがって、注釈は「那覇の入江の名所づくし」から始め、それを二とした。

・『浮縄雅文集』下では、上に引き続き十六から二十九話までを掲載する。各話の担当は、十七・十八・二十七を島村幸一、十九・二十・二十二・二十四・二十八を小此木敏明、十六・二十一・二十五・二十六・二十九を屋良健一郎とした。

・〈本文〉は、新字体でおこし、適宜、句読点、濁点を付している。また、必要な場合は（ ）を付して脇に読みを現代仮名遣いで記した。

・国王等に対する関字がある場合は、一字開けている。また、脱字等の関字については原則として「」で示し、欠落が推定できる場合は「」の中に示した。

・〈注釈〉にあたっては、以下の書に略称を用いた。『琉球国由来記』は『由来記』、『日本歴史地名大系』は『地名大系』とした。

・「琉球文学」資料注釈4『浮縄雅文集』上に既出の注釈語に関しては、上・〇話として示した。

・『浮縄雅文集』を注釈するにあたり、照屋亜季奈氏の琉球大学に出した卒業論文「『浮縄雅文集』翻刻と注釈」を参照している。参照する際は、「照屋論文」として示した。

(島村幸一)

十六

〈本文〉

慶隆のぬしは、はやうよりえだゆきまどの〔^{重カ}〕を進で勤給ひししるしにや、唐の大和のふみにもうとからず。あるは出雲八重垣の跡をたどり、わかぬ浦にひかる玉藻をひろい給ひぬ。しらぬさるよすがありて、諏方氏の兼利公にまみえ、猶、難波津の底、浅香山の奥ふかき道をとひ奉り、百草の歌を都の歌師ときこゆる春正法橋の御かたに改削を求て、いろある花に匂ひそひ給ふとなん。されば、なみちはるけき豊葦原の風をわがうるまかたに吹伝しめいばく、これひとへにそのこゝろざしのふかきによれるえにしなるべし。入木のは^{重カ}道風、行成のながれをくみて、能書のほまれ、世にひろくきこえしかば、其司にも年ひさしく任じ給へり。御心ばへ常さまの格にこえ、花もみぢのな^{重カ}さけ過ぬあて人なれば、たかきいやしきたしくなれむつび給へりし中にも、下官は志学の比よりかの御教をうけたいまつるに、おほん恵ふかく物し給へば、つるに麻の中の蓬のたぐひともなんなれりかしと、こはにたのめてかげのごとくに立したがひしこと、更にきのふけふかと覚え侍りしに、はかなく成給ひてはや十余り三とせの春にもちかづきぬること、一ゆめのさむるこゝ地すれ。こゝに下つて成ける慶

重の真人に慶隆の室も、すでに六そぢの坂をこえ給へば、五々の御跡をとひ給ふでなからへたまはんは、たのめてもたのまれぬ齢ぞかし。とにもかくにも、このたびの御手向にこそおもひとり給ふるみけしきにて、諸事のいとなみいとねむごろにさたし、師走中の四日、十三とせの御あとをとぶらひ給へば、御一そうのしたしきかざりは更にもいはず、さならぬ友どちまでしたひきたりぬ。きのふはけふのむかしにかはるならひなるに、有しながらの御宿を見るにも、過しむかしのしのばれて、品こそかはれ、したふ心のわりなさ、かの「月やあらぬ」とかくちたまひし在五中将のこと草までおもひやらるが、あはれ今このおましにいまそからんに、こゝらの人々例のさかづきかたみに汲かはし、うたふつ舞つ、よろこびあつらん事、いか計かはとおもひつゝくるに、さながらめのまへに対面給ふる心地して、懐旧のなみだたもとにあまれり。かゝる折しも手向奉らざらんはいかにぞやと、おほけなくもつゝかぬことの葉奉る物ならし。

おもひいづるそのことの葉の数々にしのぶなみだの露ぞしぐる、いま爰にあらましかば「と」おもふにぞいとゝむかしのしのはる、

哉

あきらけき光さしそへなきかげをとぶらふけふの法のともし火慶隆の三らう成ける慶命のまうとは、やつがれに十とせばかりの齢やおとり給ふらん。されど難波のよしあし、つゞばかりのへだてもなく、何くれといとねむごろに物し侍りしに、身まかりたまふて、はや十三とせになりぬ。此人もけふなん御あとを吊給ふときくものからきのふといひけふとなれこし面かげをいまはむかしにしのぶはかな

き

草のかげ昔のしたにもおもひ出んしのぶなみだのことの葉の露慶命の上つえなりける平敷氏は折しも物のつかさにさゝれて、八重山のしまに三とせの勤にわたり給ひしに、けふかゝる御吊をたびの空に

もいかさまおもひ出ぬらんと、おもひやられて、たむけつゝ、けふ故郷の面かげをさぞなたびにもおもひいづらめ

《口語訳》

慶隆殿は、早くから枝の雪、窓の螢の故事のように学問を進んで勤めなさったおかげだろうが、中国・日本の文にもうとくはなかった。一方では和歌を追究し、和歌の浦に光る美しい藻を拾いなされた。ある縁があって、諏訪兼利公に対面し、さらに和歌の底、奥深い道を尋ねて、百首の歌を都の歌の師と評判の春正法橋という御方に添削を求めて、趣ある花にさらに匂いを添えなされたという。そうであるから、波路遙かむこうの日本の風をわが琉球に伝えた面目、これはひとえに慶隆の志の深いことによる縁であろう。書道については小野道風・藤原行成の流れを汲んで、能書の名誉は世に広く聞こえていたので、そのような職にも年ひさしくおつきなされたものである。慶隆の才気は普通のものではなく、桜や紅葉の趣を見過ごさない品の良い人なので、身分の上下（に關係なく）、親しくなされた中にも、私は学問をこころざしたところから、その御教えを受け、御恵をふかくおかけになられたので、麻の中の蓬がまっすぐに伸びるようにもなったのだ、と強く頼みにして影のように従ったこと、まさに昨日今日の事実かと思っておりました、お亡くなりになられて、はや十三年の春も近づいたこと、一つの夢がさめる心地がする。ここに、下の弟である平敷慶重も慶隆の室も、すでに六十路の坂をこえなされたので、二十五年忌を行いなさるまで長生きなさることは、頼んでも頼めない年齢である。とにもかくにも、今回の御法事にこそ御心をこめなさる御様子で、諸々の事を懸命に用意し、十二月四日、十三年の御弔いをなさったところ、とくに親しい人々は言うまでもなく、そうではない友人たちまで慕ってやって来た。昨日は今日の昔になるといふならいではあるが、存命だっ

たころの御宅を見るのも、過ぎた昔がしのばれて、位こそかわつても、慕う心のはかなさは、あの「月やあらぬ」と嘆きなされた在原平の和歌まで思われるものだ。あわれ、今、この場所にいらつしやるかのように、これらの人々がいつもの杯を互いに酌み交わし、うたつて舞つて喜ぶことを、どのようだろうかと思ひ続けたところ、まるで目の前に対面なさっている心地がして、昔を懐かしむ涙が袂にあふれるくらいであつた。このような折節、手向けないのはどうかと、身の程知らずではあるが、続かないつたない言葉を奉ることとする。

思ひ出すその言葉の数々にあなたのをしのぶ涙が露のように時雨れている

いまここにいてほしいと思うほどにとつても昔がしのばれるものだから、明るい光が寄り添つて亡き人の面影をとむらう今日の供養の灯火である

慶隆の三男である慶命は、私の十年ほど年齢が下でいらつしたか。しかし、物事の判断をいろいろとても懸命にしていたが、お亡くなりになり、はや十三年になつた。この人も今日、弔いなさると聞いたので

昨日、今日と馴れ親しんできた面影を今は昔のものとしてしのぶはかなさである

草の陰、苔の下にも思ひ出すだろう。しのぶ涙の言葉の露を。慶命の上の兄である平敷氏（慶宅）は、折しも、官の職に指名され、八重山（石垣島）に三年の勤めに渡りなされたが、今日この御弔いを、旅の空にきつと思ひ出していることだろう、と思われ

手向けながら今日故郷の面影をさぞかし旅先で思ひ浮かべているだろう

〈注釈〉

- 1 慶隆 平敷慶隆。瀬底親雲上慶均の次男。兄の慶延が慶均より先に死去したため、慶均の跡を継ぐ。順治八年（一六五一）生、康熙四十五年（一七〇六）に五十六歳で死去。
- 2 えだゆきまどの「」 照屋論文は、『源氏物語』乙女の「世界の榮花にのみたはぶれ給べき御身をもちて、まどのほたるをむつび、枝の雪をならし給ふ」という文を踏まえた表現ではないかとの池宮正治の意見を記している。「枝の雪」は晋の孫康が枝に積もつた雪の明かりで勉強したという故事から、「窓の螢」は晋の車胤が螢の光で読書したという故事から、いずれも學問に励むの意。
- 3 出雲八重垣 『古事記』所収の「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作る其の八重垣を」が和歌の初めとされることから、和歌や和歌の道を指す。上・十二話の注釈11を参照。
- 4 わかの浦わ 浦回（うらわ）は、入りくんだ海岸の意。ここでは、和歌の世界といった意味。また、歌枕に和歌浦があり、和歌山市の和歌川下流に位置する。
- 5 ひかる玉藻をひろい 玉藻は、美しい藻。ここでは、和歌の道に励み、学びを深めていったことの喩え。なお、「ひろい」（拾い）の仮名遣いは正しくは「ひろひ」。
- 6 諏方氏の兼利公にまみえ 諏訪兼利（一一六一―一六八七年）。薩摩藩主島津光久の家老をつとめた。和歌を岡本宗好に学び、歌人として知られる。徳川光圀の命により山本春正・岡本宗好らが編んだ『正木のかづら』（延宝二年の序文あり。完成は貞享三年）に十三首、薩摩で編まれた『松操和歌集』（文政十一年）に二十首入集（津田修造「薩摩の歌人『諏訪兼利』について」）。正保二年（一六四五）には在番奉行として琉球に渡り、同四年まで滞在した。平敷慶隆は、諏訪が在番奉行だった頃には誕生しておらず、両者が「まみえ」たのは、慶隆が薩摩への使節の一員として鹿児島に赴いた一六七三年か一六七六年（「東姓」家譜）のことであろう。
- 7 難波津 ここでは、和歌の道の意。難波津は古代

の難波江にあった港。王仁の「難波津に咲くや此の花冬ごもり今は春
べと咲くや此の花」の歌は手習いの初歩に用いられたことで知られる。

8 浅香山 ここでは、和歌の道を指すのだらう。「浅香山の奥ふかき

道」は、この直前の「難波津の底」と対句になっている。浅香山は福

島県郡山市にある山で歌枕。安積山とも書く。『万葉集』所収の「安積

山影さへ見ゆる山の井の浅き心を吾が思はなくに」は、王仁の難波津

の歌と共に『古今集』仮名序で「歌の父母のやうにてぞ手習ふ人のは

じめにもしける」とあり、手習いの始めに用いられていた。9 百

草の歌 百首の和歌。和歌をまとめて百首詠むことは、平安中期の曾

禰好忠に始まる。以後、天皇などの詠進の命に応える際、寺社に奉納

する際、練習の際などに百首和歌が詠まれた。ここでは、平敷慶隆が

添削を請うために春正法橋（山本春正）に百首の和歌を送ったことを

指す。春正の歌文集『舟木集』には、「琉球人の百首添削の奥書三べ

ん」という文章が収録されている（津田修造「山本春正年譜稿（下）」）。

この文章から、三名の琉球人が諏訪兼利を通じて春正に添削を求めて

きたことが窺える（屋良健一郎「琉球人と和歌」）。この三名の内の一

人が平敷慶隆であろうか。10 春正法橋 山本春正（一六一〇―

一六八二年）。蒔絵師として有名だが、木下長嘯子（木下勝俊）の教えを

受けて歌人としても活躍した。寛文五年（一六六五）には水戸徳川家

に招かれ、『万葉集』の校勘などにあたった。天和二年（一六八二）に

催された春正の追善和歌会の詠草の詞書には「山本法橋先主、世にい

まそかりしほどは、此国のみならず、琉球の遠つねまで其徳をかゝや

かしたまひ」や「其名、秋津洲の外に琉球国の人すら伝て学ぶものあ

りき」（『文翰雜編（二）』臨川書店）とあり、琉球の和歌に影響を与え

た人物として認識されていたことが分かる。11 豊葦原 日本国の

美称。12 うるま 琉球の美称。主として和文の中で用いられた。

上・三話の注3参照。13 めいぼく 面目。14 入木 じゅぼく。

書跡。書道。15 道風、行成 小野道風と藤原行成。どちらも平安

中期の能書家で三蹟のうち。16 其司にも年ひさしく任じ給へり 平

敷慶隆は、康熙二十二年（一六八三）から同二十九年（一六九〇）ま

で評定所筆者を、同年から三十三年（一六九四）まで評定所筆者主取

をつとめた。どちらも文書作成を行う職で、「其司」はこれらの職を指

すのだらう。17 御心ばへ ころばえ（心延え）は、才気ある心

の働きや美的感覚のこと。18 あて人 あてびと。「貴人」と書く。

高貴な人。上品な人。19 なれむつび なれむつぶ（馴睦）の連用

形。馴れ親しんで。20 下官 下級の官職。この和文の作者が自分

のことをへりくだって言っている。後述のように作者は石嶺真忍の可

能性がある。21 志学のうたいまつる 「志学」は学問に志すこと。

『論語』に「吾十有五而志于学」とあることから、十五歳を指すことも

ある。「たいまつる」はたてまつる（奉る）の変化した語。この和文の

作者の可能性がある石嶺真忍（一六七八―一七二七年）は平敷慶隆よ

り二十七歳年下であり、十五歳の時（一六九二年）に元服している。

その頃に慶隆に師事したのだろうか。当時、慶隆は首里王府の行政の

中枢機関である評定所の文書作成を統轄する評定所筆者主取という職

にあった。22 麻の中の蓬 「麻につるる蓬」ともいう。麻のように

まっすぐな物の中にまじれば、蓬も曲らずに伸びることから、善良な

人の感化を受けて自然と善人になることをいう。23 こはにたのめ

て「こは」は「強」、「たのめて」は「たのみて」であらう。強く頼み

として。24 十余り三とせの春にもちかづき 平敷慶隆が亡くなっ

て十三回忌の春が近づいていることを指す。慶隆は康熙四十五年（一

七〇六）に死去しているので、十三回忌の春は康熙五十七年（一七一

八）正月であらう。この後の部分に「師走中の四日、十三とせの御あ

とをとぶらひ」とあることからすると、十三回忌の供養は、正月を待

たずに康熙五十六年（一七一七）十二月四日に行われたようである。

25 下つえ成ける慶重の真人 平敷慶隆の弟の慶重。慶均の三男。「え」は漢字で「兄」。「真人」は目下の人を呼ぶのに用いる。 26 慶隆の室 継室の思戸（雍氏具志堅親雲上興尤の娘）。順治十五年（一六五八）生まれ。乾隆八年（一七四三）に八十六歳で死去。慶隆の三男である慶命の母。 27 五々の御跡 二十五年忌のこと。追善供養は二十五年忌をもつて終るともいわれる（『例文仏教語大辞典』「二十五年忌」）。 28 きのはけふのむかし 一日前のことでも現在からみると過去であること。月日の経つのが早いものであることのたとえ。『閑吟集』に「唯人はなさけあれ、夢の夢のきのふはけふのいにしへ、けふはあすのむかし」、『慶長見聞集』序文に「きのふはけふのむかし、けふはあすのむかしといへり」とある。 29 月やあらぬとかくちたまひし在五中将のこと草 在原業平の「月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」（『伊勢物語』四「西の対」という和歌を指す。「かくち」は、「かこち」（託つ）の連用形）であろう。 30 あつらむ 正しくは「ありつらむ」か。「つらむ」は、完了の助動詞「つ」の終止形に推量の助動詞「らむ」のついたもの。したろう。 31 ならし 「なり」の断定をやわらげた表現。上・八話の注23参照。 32 おもひしぐるゝ この歌は宜湾朝保が編んだ『沖繩集』に「慶隆が十三回忌の追善に」と題して石嶺真忍の作として収録されていることから、この和文も真忍作の可能性がある。また、朝保が『沖繩集』編纂のあたつてこの和文を参照した可能性もあろう。 33 あきらけき 「あきらけし」の連体形。曇りなどがなくきれいだである。清らかである。 34 法のともし火 仏法を灯火にたとえた表現。上・十五話の注28参照。 35 慶隆の三らう成ける慶命 平敷慶隆の三男である平敷慶命。康熙二十七年（一六八八）に生まれ、同四十四年（一七〇五）に十八歳で死去。 36 やつがれ 僕。自分をへりくだってという語。この文の作者を指す。 37 十とせばかりの

齡やおとり 「おとり」は劣ること、年齢が下であること。平敷慶命は一六八八年生で、石嶺真忍の十歳下である。この年齢差も和文の作者が真忍であることを示唆する。 38 難波のよしあし いいか悪いか。「難波の葦」という語を踏まえた表現。 39 つゝばかりのやたて 照屋論文は「隔てなく仲良くしたというような意か。未詳。」とする。 40 十三とせ 平敷慶命は康熙四十四年（一七〇五）に死去したので、平敷慶隆の供養が行われた康熙五十六年（一七一七）十二月は十三回忌の年に当たるとのだろう。 41 苔のした 墓の下。死後。 42 しのぶ 「しふ」に「の」が傍記してある。 43 慶命の上つえなりける 平敷氏 平敷慶命の兄（慶隆の次男）である慶宅。康熙十五年（一六七六）に生まれ、乾隆十一年（一七四六）に七十一歳で死去した。 44 八重山のしまに三とせの勤にわたり 平敷慶宅の家譜には「康熙五十四年乙未八月十四日、八重山嶋在番毛氏安里親雲上安三為筆者（同僚壽氏又吉筑登之親雲上祐昌）、翌年丙申四月朔日、那覇開船、同九日、到于八重山嶋、公事全竣、同五十七年戊戌六月九日、従彼嶋開洋、同十二日帰国」とあり、筆者として康熙五十五年（一七一六）四月から同五十七年（一七一八）六月まで石垣島で勤務していたことが分かる。 45 御吊を 「御吊に」の「に」を「を」に修正している。（屋良健一郎）

十七

〈本文〉

糸満里之子いた（め）ることば

惣慶

糸満里のしは、はやうより出雲八重垣のむかしをたどり、和歌の浦に光る玉もをかり、からのやまとのふみにもうとからぬ御心ばへ、よの

なみをこえ、糸竹の道にもいみじうまし／＼て、優にやさしき御ちこにて侍りしが、ことしみなづきの二十日あまり、身まかり給ひて、みやげ森とかやいへる所のしおもてひとつの丘におさめはふむりつ。御からをだにまだ見ぬことのかなしき、物にゝるべくもあらず、うつゝともさらにおもひわかれず、あるは夢かとたどり、あるはよみがへらせ給ふこともありやすると、まつこ、ちいたし、ありしながらの御面影ひと身に立ちそひて、いつ忘るべしとおもほえず。愁歎のみだまなこにさへぎり、おもひのけぶりむねにみちて、はるゝときなし。生者必滅の世のならひ、いたくなげくべきことにもあらずとおもふ人もやあらん。しかはあれど、ふるきことのはにいひつたへけん、八百とせのよはひたもてりし翁すらも、つゐにつまの九百(くち)やはあらぬとなげきあまりしためしもあれば、ましていまだ年にもたらせ給はぬ、はなのやうなりし御ちごを、苔の下にひとりうちすてゝ、さらぬ別になしはてぬるなん、かなしうあたらしくあはれるわざならずや。いかでかこの御別をかなしみ、いかでか御なごりをいたみざらん。さればたゞにはいかにぞやとて、いさゝか心ざしをつく(か)「り」。かくはなと見し人のすがたもゆめなれやうつゝに残るあとしなければうきふしの数ぞ身にそふくれ竹の千代もといひし人に別てたづね見ぬまぼろしもがなうつ蟬のよをのがれにし玉の行衛をうらめしないかなる世より死出の山こえてかへらぬ習ひなりけん夢までもなき人なれやさよ衣かへしてぬれど絶てみざりき

はかなくてたのみもなきは人なれやはなもちりてはまた咲にけりかきをれしふみなどみるにも、たゞその折の心地して、ありつる御かほかたちのいとゞ身に立そひて、いつ忘るべくもあらず。ひとへになみだもよほすつまとなりぬ。よへて口にいはるゝまゝ、

見るたびにおつるなみだの玉章(たますず)はありてかひなきかたみなりけりかす／＼にみれば涙ぞかきくらすうきかたみなる筆のあとかな

すゝむしのなくを聞て、この君の「あはれといひしものゝ侍ぞかし」とおぼえて

あかれとて聞けん人もなきものをなにすゝむしのふりたてゝ、なき人のめでけん物ときくからに涙ふりそふすゝむしのこゑきならし給ひし衣の残りたるを、人のさほにかけてほしけるを見て

かたみとて残るもはかなから衣きつゝ、馴にし人はなきよに23(みなのか)三七日に、思ふどちかいつらねて、墓所にまかりて

なき跡の野をなつかしみけふとへばたゞあさぢふに露ぞやどれる折しも松の夕かぜ、物「24」吹てたえずや苔の下にとまついとかなし。

草むらになくむしのこゑ／＼もなき人をとみなふかときこゆ。すべてあはれをそふるはしとなり、よろづこゝろぼそう、あんじゐつゝ、ものうかる口にまかせて

なき人のいかにあはれと「26」ぬらんつかの上なる松の夕風ねにたてゝ、むしもなくなり苔の下に露と消ぬる人やをしみて

をくるともつゐには行て死出の山に庵ならべて近くあひみんおもへ君うきよになにか久方の月もみてればまたかくるなり

また思ひつゝけるまゝ、

なき跡の名残をしたふけふをさへしのぶむかしとまたやなりなんぞゝろなることをそこはかとなくかきつくれば、ことにみだれたらん

糸口の口なきやうにてなにくれと、さらにみえわかれず、わが身ながらみぐるしけれ。としなき玉のいさゝかなぐさめにもなりもやすると思ふから、あぢきなくも筆にまかせつゝ、。

宝永八年七月

〈口語訳〉

惣慶（忠義）

糸満里之子は、幼少の頃から和歌の道を学び手本となる優れた歌を

探して、漢文・和文にも疎遠ではない態度を持ち、歳を重ねると管弦の道にもことさら親しみなされて、すばらしく優美な稚児でございまして、今年（一七一一）六月の二十日余りの日に、お亡くなりになって、見上森とかいう所の北側の丘の一面に埋葬した。いまだ亡骸さえ見ていないことの悲しさは、他の物と比べられないほどで、これが現実かと全く区別がつかず、あるいは夢ではないかと考えをめぐらせ、あるいは甦らせなすることがあるのではないかと、待つような気持ちになり、ありし日の面影がまさしく身に浮かんで、いつ糸満里の子のことを忘れることができるのか分からない。悲しみの涙が流れて目を覆い、里之子を思う気持ちは胸に満ちて、晴れる暇がない。生者必滅の世の習いは、当然でありひどく嘆くことではないと思う人はいらるだろう。そうではあるが、伝わっている故事にある、八百歳の年齢を保った翁でさえも、最後には妻が九百歳は生きられないことを知ると、ひどく嘆いた例があるので、ましていまだ若き者で、花のような盛りの稚児を墓にひとり置いて、避けることができない別れをするとは、悲しくも惜しくも憐れなることではないか。どのようにしてこの御別れを悲しもうか、いかにしてこの御名残りを悼まないことがあるのか。そうであるので、ひたすらどうしようかと、少しばかり思ったことを綴り書く。

花の様な稚児だと見たその姿も夢であつたか。この世に残る跡さえないので。

起き臥すごとに辛く悲しい思いが我が身に増してくる。千代までもといった人と別れることになったのだ。

幻だけでも見たいと思ひ、この世を去ってしまった貴方の魂の行衛を訪ねてみたが、かなわなかった。

残念であるよ。いつの世から死出の山を越えて帰えることがない、習いになったのだろう。

夢にまでも現れない人になったのか。夜着を裏返して寝たのだが、貴方の夢を見ることはなかった。

移ろいやすく頼みにできないのは人というものだ。花は散つてもまた咲くのだが。

書いていた文を見るにつけ、ひたすらそれを書いた時の気持ちになって、生前の姿がいよいよ立ち現れてきて、いつまでも忘れることが出来ない。ただ、涙をもよおすきつかけになった。酔って口に出るままに、次の歌を詠んだ。

見るたびに落ちる涙をもよおす貴方からの手紙は、残っていても無駄になった形見であつたよ。

何度も何度も見える度に涙でかき曇ってしまう。辛い形見である貴方からの手紙は。

鈴虫が鳴くのを聞いて、糸満里之子が「しみじみとしたものがこの世にありますね」といったことが思い出されて、次の歌を詠んだ。

あわれだと聞く人がいなくなつたのに、どうして鈴虫はそんなに勢いよく鳴くのだろうか。

亡き人が愛でたというものであると聞いたので、鈴虫の声を聞くと涙が増してくる。

着慣れなかつた着物で残っていたものを、ある人が竿に掛けて干しているのを見て、次の歌を詠んだ。

形見として残っていても無駄であるよ。着慣れた人が居なくなつたこの世には。

三七日に親しい者どうしが一緒になって、墓におもむいて次の歌を詠んだ。

貴方の墓がある野を懐かしんで今日訪ねたが、ただ茅萱に露が降りているだけであつた。

ちようどその時は、松の間に夕風がひどく吹いてやまず、ずっと墓の

下で待っているかと思うとたいへんに悲しい。草むらに鳴く虫の声も亡き人を連れ添うのかと聞こえる。すべてはしみじみとした思いを一層増すきっかけとなって、何事につけてももの寂しくあれこれ考えながら、気が晴れない思いで口に任せて、次の歌を詠んだ。

亡き人がさぞ悲しいものだと思いたらう。墓の辺りに吹く松の夕風の音を。

音を立てて虫も鳴くようである。苔の下露と消えてしまった人を惜しんで。

貴方の野辺送りをして、ついには私も死出の旅にでる。あの世で共に庵を並べよう。

貴方は思ってみてほしい。どうしてこの浮き世に月が満ち、また欠けていくのかを。

また、貴方を思い続けるにまかせて、詠んだ。

葬られた墓で貴方の名残を懐かしく思う今日のことまでは、(やがては)、懐かしく思う昔のことになってしまっただろう。

はつきりした理由もないことをとりとめもなく書き付けたので、特に乱れている糸の始まりがないようでもなく、全く(文章の)先が見えず、我が身ながら見苦しい。灯っていない貴方の魂への少しの弔いになるのではないかと思うので、つまらないものであるが筆にまかせて書いた。

宝永八年(一七一二) 七月

〈注釈〉

1 糸満里之子 「照屋論文」に宝永七年(一七一〇)の江戸立の際、楽童子であった人物だとあるが、佐渡山安治・横山学「琉球使節使者名簿」(『江戸期琉球物資料集覧』第四卷所収)によれば、宝永七年に琉球が送った謝恩使節の「小姓」の名簿に糸満里之子(毛姓)の名が

見える。その人物だとすると、江戸立から帰ってきたその年(一七一〇)に亡くなっていることになる。『那覇市史家譜資料(三) 首里系』には「毛姓家譜(伊野波家)」の「八世盛平伊野波親方」(唐名毛克盛、一六四八―一七〇〇年)の「次男」に「盛任糸満親雲上」がいる。「次男」の生没年は不明だが、「長男」である「伊野波親雲上唐名毛得範」は一六六七に生まれている。「毛得範」は一時(康熙三十七年)、「兼城間切糸満地頭職」になっている。糸満里之子が「長男」とやや離れた歳の弟であれば、「盛任」が糸満里之子である可能性がある。楽童子であっても「小姓」であっても、これらは有力な士族の家の元服前の少年がなることになっている。しかも、芸能等に秀でた美貌の人物が選ばれる。「琉球人行列記」(天保三年、『江戸期琉球物資料集覧』四卷所収)には「正使小姓美少年也」と記されている。「糸満里之子いた〔め〕ることば」には、夭折した「美少年」糸満里之子を失った惣慶の思いが記されている。琉球における男色は余り多くはないが、例えば組踊「護佐丸敵討」に父護佐丸の敵討ちをしようとする鶴松・龜千代を見て「花盛りわらべ押列れて踊るなりふじの美らさ呼べよ」(花盛りの子供が、連れだつて踊っている。その姿が美しい。呼べよ、呼べよ)、「執心鐘入」にも、宿の女に追われて座主によって寺にかくまわれた若松を坊主が「やかれよも座主がかじめたる若衆留守ならば互いに語る嬉しや」(うるさい座主が匿った若者だ。座主が留守をするならその隙に語り合うことの嬉しさよ) などという科白がみられる。ただ、糸満と惣慶との間に実際に衆道関係(男色関係)があったかどうかは分からない。糸満里之子が名高い美少年であり、その人物が夭折した悲しみを記した本話は、男色的な恋愛関係をテーマとしたひとつの文芸作品である可能性も考えられる。琉球は概して衆道文化が盛んではない。しかし、末吉安恭が南方熊楠に宛てた書翰(大正六年六月六日消印の書簡)には、本話を翻刻して糸満と惣慶の関係を論じてい

る（池宮正治・崎原綾乃「南方熊楠宛末吉安恭の書簡」）。惣慶は一六八五年生まれ。本話が書かれたのは、惣慶が二十五歳の時である。糸満が十五歳程で亡くなっているとすれば、二人には十歳程の年齢差があるということになる。2 惣慶 惣慶忠義のことか。上・六話「盆山記」にも惣慶の名が記される。上・六話の注釈2を参照。3 出雲八重垣のむかしをたどり 和歌の道をたどり学ぶ意。上・十二話の注釈11を参照。4 和歌の浦に光る玉もをかり 注3と同様、優れた和歌を探し学ぶ意。「和歌の浦」は『万葉集』に「若浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさしてたづ鳴きわたる」と詠まれる名勝の地（紀ノ川旧河道の和歌川下流右岸）で、和歌の道がかけられている。3が『古事記』がふまえられ、4は『万葉集』がふまえられた対になった表現か。3を含めて下・十六話に同様の表現がある。下・十六話の注釈4を参照。5 糸竹の道 管弦の道。6 いみじう 「いみじに」の「に」を見せけちして「う」と傍記している。7 ことしみなづき 「ことし」は末尾に記された「宝永八年七月」の記載から宝永八年（一七二一）六月であることが分かる。ただし、この年の二月に改元され、「正徳元年」になっている。本話は、糸満里之子が亡くなってから一ヶ月後に書かれていることになる。8 みやげ森 糸満里之子が首里士族だとすると、「みやげ森」は首里にある地名だと考えられる。『球陽』尚真王二十五年（一五〇一）条に見上森陵に葬られていた先王尚円王を玉御殿に移送した記事が見える（『地名大系（沖縄）』。『由来記』巻五「二一見上森ノ御イベ金城村」があり、「みやげ森」はここであるう。9 おもひのけぶり 「思ひ」の「ひ」と「火の煙」が掛けられている。火がつくほどに激しく思う意。10 ふるきことのは 旧伝、故事。ただし、どのような旧伝か不明。11 さらぬ別れ 避けることが出来ない別れ。死別。12 うきふし 辛く悲しいこと。「ふし」から節を連想させ竹の縁語になる。ただし、琉球語のオとウとの

混同があるとすれば、起き臥しとも考えられる。13 くれ竹 呉から伝わったとされる竹の一種。淡竹（ハチク）のこと。葉が細かく、節が多い。竹の「ふし」を意味する「よ」から「世」「夜」の枕詞になる。ここでは「千代」を引き出している。14 うつ蟬 この世、この世の人の意。「うつ蟬の」は「世」「命」「人」「身」を引き出す枕詞。15 かへらぬ 「かへらん」の「ん」を見せけちして「ぬ」を傍記している。16 夢までも この歌の「さよ衣」（夜着、寝まき）を裏返して寝ると思う人の夢を見るという習俗があるということか。17 はかなくて この歌は、『大島筆記』「附録」に入る「琉球人和歌」に同じ歌がある。これを含めて、四首の和歌（注17、21、22、28の和歌）が、『大島筆記』（一七六二年）の「琉球人和歌」に入る歌と同じである。「琉球人和歌」（十六首）は、一首を除いて「平鋪親雲上作」とされる。「平鋪親雲上」は、平敷屋朝敏と考えられる人物である。『浮縄雅文集』と「琉球人和歌」とがどのような関係にあるのか、あるいは『大島筆記』の「琉球人和歌」は、どのような歌が集められたのか、興味深い問題が見えてくる。『浮縄雅文集』の成立がいつなのかによるが（解題参照）、『大島筆記』が後のものだとすると、少なくとも、惣慶の和歌が「平鋪親雲上」の和歌として理解されるような流れがあったということか。惣慶は二度にわたり八重山（雍正七年（一七二九）から三年間）・宮古（乾隆十年（一七四五）へ「流罪」されており、宮古でそのまま死去している（『伊姓家譜（惣慶家）』『那覇市史家譜資料（二）首里系』）。ある意味では、惣慶も朝敏と同様に悲劇的な生涯をおくった人物である。18 もよほす 「もよふす」の「ふ」に見せけちして「ほ」を傍記している。19 よへて 「照屋論文」では「よつて」としている。本来は「よひて」だが、琉球語のエとイの混同から「よひて」を「よへて」と表記したか。20 玉章 手紙、文章。21 あかれとて 『大島筆記』「附録」に入る「琉球人和歌」に同じ歌があ

る。なお、冒頭の「あかれ」は「あはれ」の誤りか。「琉球人和歌」の歌も「あはれとて」である。22 かたみとて『大島筆記』『附録』に入る「琉球人和歌」に同じ歌がある。なお、「から衣」は着る、裁つ、反す、裾、袖等の衣服にかかわる語を引き出す枕詞。「から衣きつ、馴にし」は、在原業平の有名な歌「唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ」(『古今和歌集』四一〇)がある。

23 三七日 亡くなって二十一日目のこと。24 「」末吉(注1)は「すぐく」と起こしている。それに従う。25 こゝろぼそ「こゝろぼそく」の「く」を見せけちして「う」を傍記している。26 「」末吉(注1)は「聞」と起こしている。ただし、二字程度の空白であり「き、」か。27 松の「松風」の「風」を見せけちして「の」を傍記している。28 おもへ君「大島筆記」「附録」に入る「琉球人和歌」に同じ歌がある。なお、「久方の」は「天」「雨」「雲」「空」「光」「夜」等にかかわる語を引き出す枕詞。29 しのぶむかしとまたやなりなん 一連の和歌の最後の歌の下句は、死者を鎮魂する句(生者の思いが鎮まる句)になっている。30 そゞろなることをそこはかとなくかきつくれば『徒然草』の有名な冒頭句。31 みぐるしけれ。もしなき玉の 本文「みくるしけれはもしなき玉の」であり、「みくるしけれは」の「は」を見せけちしている。「照屋論文」は「みくるしけれど、もし、なき玉の」と理解している。なお、検討を要するか。

(島村幸二)

十八

〈本文〉

¹ 日高次左衛門

² 糸満さとのし雅丈は、³ 去々年武蔵の国にてやつがれもたいめんし侍るに、おもはずも身まかり給ひぬることども、⁴ 此一卷におさく書⁵つゞくり給ふ御ことばのしなく、⁶ ゆうにあはれに拝吟して⁷ ふし毎に哀ぞこもるくれ竹のかはらぬ色に人のならいて⁸

〈口語訳〉

糸満里之主様は、一昨年(一二一〇年)武蔵国(の薩摩屋敷)で私も対面しましたが、思いがけずお亡くなりなされたことなどを、此の一卷にきちんと書き連ねなされた言葉の様々は、(私には)優雅で趣き深く思われたので、それに吟唱いたして次の歌を詠んだ。

節(歌)ごとに趣きある思いが籠もる呉竹が、変わらないものとして人の親しめるものになればよいのだが。

〈注釈〉

1 日高次左衛門 上・十三話の注5参照。なお、十七話と十八話とは、連続した関係の文である。十八話は十七話の跋、奥書的な文か。
2 糸満さとのし 十七話の注1参照。3 雅丈 男性を敬っている語。4 去々年 糸満里之子が琉球使節の一員として江戸に滞在していたのは一七一〇年と推定される(十七話の注1参照)。本条は一七一二年に書かれたことになる。5 武蔵の国 薩摩の江戸屋敷をさす(上・十三話の注1・注2参照)。江戸の薩摩屋敷は、上屋敷が三田に、中屋敷が幸橋門(内幸町)、下屋敷が芝高輪に、蔵屋敷が田町にあった。江戸立の「琉球人」は、下屋敷に逗留した。6 やつがれ自分を謙っている語。近世期はある程度身分ある男性のやや改まった場での文語的な用法として使われる。7 おさく 正式には「をささ」。しっかりと、きちんとこの意。8 書つゞくり給ふ この文を日高が書いたとすると、「給ふ」は十七話を書いた物慶忠義に対する

敬語と理解される。すなわち、「此一巻」とは十七話全体を指しているのか。特に十七話の二番目の和歌「うきふしの数ぞ身にそふくれ竹の千代もといひし人に別て」に「呉竹」が共通してでる。歌も呼応した内容ではないか。9 ゆうにあはれに 優雅で悲しいの意。「ゆうに」は正式には「いうに」。10 拝吟して「拝吟」は他人の詩歌を吟唱することだが、ここでは十七話全体、あるいは十七話の二番歌に対して詠むということか。11 ならい 仮名遣いは「ならひ」となるところ。

(島村幸一)

十九

〈本文〉

毛氏具志川親方盛昌卒去之時^(いもちう) 吊¹

屋良親雲上²

実や、人中天上の善果を受るといへども、三界は無安火宅なりといひども、また北州の千年も限る。千年のめぐり来れば、いかでのがるべき。蓬萊の仙客も兎角終あり^(おわり)。彼の末世一代教主の如来も、生死の掟をばのがり給はず。まして拙き娑婆のあたし世、是道芝の露ぞかし。されば爰に、御外祖毛氏盛昌公、暮し年の末比より異例に見えさせ給へば、たゞかりそめに風の心地なるべしとおもひぬれど、歎慮穩ならず、医陰両道に命じ、日夜怠たらず療養をいたすといへども、定業の病ひには祈る所なし。葉草しるしなく、次第に重らせ給ひ、限月十と云四日には、其甲斐なく席を替給へば、鳳子龍孫を始、嘆き悲み給ふ有様、よそのみる目も、哀さをたとへていはんかたもなし。かくて葬礼の日には、僧俗男女群集して香華祭奠し、墓所へ葬送まで営^(いとなみ)ける。誠に、ませしとき情過さぬ人にてましませば、貴となく

賤となく睦^(むつ)びふかりしかば、偏に老姥^(らうぼ)をもするがごとくなれば、感涙の袖をしぶりく^(い)て出なん

忘れめやいひし言葉のけふよりはおもひ出てや袖ぬらすらん

彼の岸に渡る舟人乗^(のり)を得て今漕いづるちりの浮世を

なげくぞよそのほとく⁽²³⁾のよしあしは思ひつきても覚ひえぬ身ぞ

于時享保七年寅正月十七日

〈口語訳〉

毛氏具志川親方盛昌が死去した時の弔い

屋良親雲上

本当にまあ、人間界や天上界に生まれる善い果報を受けてさえ、この世は安らぐことのない燃える家のようなではあるが、この世とは別の北俱盧洲の住民の寿命も千年を限りとする。千年が経てば、どうして死を逃れることができようか。蓬萊山の仙人にも、とにかく寿命がある。末世に生涯をかけて教を説いたあの釈迦如来も、生死の定めをお避けになることはできない。まして、とるに足らない人間界の無常の世に住む我々は、道の芝草に置かれた露と同じようにはかない存在である。それ故ここに、尚敬王のご外祖(ご生母の父君)である毛氏盛昌公は、昨年の末頃からご不例のようにお見えになったので、単に少しの間、風邪気味なのだろうと思ったが、尚敬王は(心配して)心中穏やかでなく、医道と陰陽道のものに命じ、日夜怠らずに療養の限りを尽くしたが、前世の業による病には祈祷の及ぶ余地がない。葉草も効果がなく、次第に病が重くなられ、正月十四日には治療の甲斐なくお亡くなりになったので、盛昌公のご子孫をはじめとして、嘆き悲しみなさるご様子は、はた目からも、哀れさをたとえて言うすべもない。それから葬礼の日には、僧侶や俗人の男女が集まって香や花を備えて供養し、墓所への葬送までとり行った。本当に、(盛昌公は)ご存

命の時に情けを捨て置けない人でいらつしゃって、貴賤の区別なく親交が深かったため、もっぱら老婆さえも供養するような状況だったので、感涙の涙で濡れた袖をしぼって（和歌を）詠み出そう。

忘れることがあるだろうか、生前にあなたが言った言葉を。今日からその言葉を思い出しては、涙で袖をぬらすでしょう。

向こう岸（涅槃）に渡る船頭の船に乗ることができて、今漕ぎ出す、汚れた無情の現世を。

かなしいことだ。供養に参加した、ほとんどの貴賤の人たちが敬慕したとしても、（亡くなった盛昌公はその思いを）感じられない身の上であるよ。

享保七年（一七二二）寅正月十七日

〈注釈〉

1 毛氏具志川親方盛昌 池宮正治は、伊野波親方盛紀（一六一七～一六八八年）の四男、毛邦秀（一六五五～一七二二年）とする。また、すぐ上の兄が『思出草』の著者、識名盛命（一六五一～一七一五年）だとも指摘している（『近世沖繩の肖像 上』）。盛紀の三男・四男については、『毛姓家譜（伊野波家）』の「七世盛紀」に「三男盛命 識名親方 四男盛昌 具志川親方」とある。盛昌については、『毛姓家譜（永嘉家）』の「九世毛弘休」（盛昌の子）に詳しく、以下の記述がある。

「父毛国鼎中城按司護佐丸盛春八世毛邦秀具志川親方盛昌、順治十二年乙未七月十二日誕生（母真尹金号性月向氏大工廻親方朝株長女）康熙六十一年壬寅正月十四日 卒寿六十八号竣峻」（括弧内割行）。 2 屋良親雲上 上・十四話も同じ作者か。池宮正治は屋良宣易とする（『近世沖繩の肖像 上』）。宣易については、十四話の注1を参照。 3 実や、人中天上の善果を受るといへども 謡曲『江口』に「あるひは人中天上の善果を受くといへども」という、同様の表現がある。「人中天

上」は六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上）のうちの人間界と天上界。ここで言う「善果」は、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅でなく、人間界や天上界に生まれる善い果報のこと。屋良親雲上作の本書十四話の冒頭でも、「実にや」から始まる謡曲の文章を引用している。上・十四話の注2参照。 4 三界は無安火宅なり 『妙法蓮華經』卷二「譬喻品」の「三界無安 猶如火宅」に由来する表現。「三界」は欲界・色界・無色界で、衆生が生死流転する三つの迷いの世界。この場合はこの世を指す。苦しみが多く、平穩のないこの世を燃える家にたとえている。「三界無安ノ火宅ニ心ヲ留ベカラズ」（『沙石集』卷七「先世房ノ事」）など、用例多数。 5 北州の千年も限る 北州は、須弥山の四方にあるとされる四つの州のうち、北方に位置する北俱盧洲のこと。北俱盧洲の住人は千年の寿命があるとされる（『阿毘達磨俱舍論』卷十「北俱盧人定寿千歳」。いくら長くても、寿命には限りがあることの喩えとして引かれる場合が多い。『曽我物語』卷四（鎌倉殿、箱根御参詣の事）に「北洲の命も、千年のかぎりをたもつなり。それにもかぎりあればにや」、謡曲『楊貴妃』に「北州の千年終に朽ちぬ」、番外謡曲『浦島』に「北州の千年天上の五衰」などの例がある。 6 蓬萊の仙客 蓬萊山の仙人。蓬萊山は神仙思想で説かれる三神山の一つ。不老不死の霊薬があるとされる。 7 末世一代教主のがり給はず 謡曲『熊野』に「末世一代教主の如來も、生死の掟をば通れ給はず」という同様の表現がある。「末世一代教主の如來」は釈迦を指す。「のがり」は琉球方言。 8 娑婆のあだし世 「娑婆」は釈迦の教化が及ぶ世界で、人間界のこと。「あだし世」（徒し世）は無情の世。 「娑婆のあだし世」という表現は、管見の範囲で確認できず。 9 御外祖毛氏盛昌公 外祖は母方の祖父。池宮正治は、盛昌の女が尚敬の父尚益の妃聞得大君思真鶴金（一六八〇～一七六五年）であるとする（『近世沖繩の肖像 上』）。『中山世譜』卷九「尚益王」に、「妃、聞得大

君加那志。童名、思真鶴金。号、坤宏。(毛氏具志川親方盛昌女。始称「野嵩按司加那志」。康熙十九年庚申、八月十七日生。乾隆三十年乙酉、十二月初三日薨。寿八十六。葬于玉陵。)とある。 10 異例

不例。病氣。 11 叡慮穩ならず 「叡慮」は天子の御心。尚敬王が外祖父盛昌の病状を心配して心中穏やかでないことを言う。 12 医陰

両道 『太平記』 卷十一 「正成参兵庫事付還幸事」、卷十六 「聖主又臨幸山門事」に「医陰両道ニ至マデ」の例がある。「医陰」は医道と陰陽道を指すが、表現の問題で琉球の実態とは無関係か。 13 定業の病

ひには祈る所なし 「定業」は前世の業により定まっている病。上・十五話にも、「定業の病ひは祈に所なし」というほぼ同文がある。「定業の病」が癒えないとする表現には、以下の例がある。『平家物語』 卷第

三 「医師問答」に「是則ち定業の病いやさざる事をしめさんが為なり」、「太平記」 卷第四十 「將軍薨逝事」に「何ノ薬カ定業ノ病ヲバ愈スベキ」。 14 阪月十と云四日 正月十四日。「阪月」(すうげつ)は

正月の異称。盛昌の命日は『毛姓家譜(永吉家)』の記載と一致する(注1参照)。 15 席を替 生者の座席から死者の座席へと席替える

意で、死亡したことを言うか。照屋論文は「席」を「籍」の当て字とする。 16 鳳子龍孫 帝王や貴族の子孫(『漢語大詞典』「帝王或

貴族の後代」。具志川親方盛昌の子や孫を指す。 17 香華祭奠 「祭

奠」は霊前や墓前に供え物をして祭ること(『漢語大詞典』「置供品于霊前或墓前祭祀」。香や花を供えて、供養すること。 18 ませし サ

行四段動詞「ます」(在す)に過去の助動詞「き」の連体形がついた形、「ましし」の琉球方言か。生前の盛昌のこと指し、「いらつしやっ

た」の意。 19 するがごとく 原文は「することく」で、「か」は右に傍記して補入。 20 しぶりくゝて 「しぶりくゝて」の琉球方言。

21 出なん 池宮正治は、『近世沖縄の肖像上』所収の翻刻にて「出」に「ママ」と傍記している。和歌を詠み出そうの意で、「出さん」の誤

りか。 22 ちりの浮世 穢れた世の中。冷泉為広の「たのもしな塵のうき世のまよひをもつひに南の風や払はん」(『為広集』 六八)などの例がある。歌語としては、「塵の世をなを捨果ぬみのむしのすまゐもおなし玉の下庵」(『新統題林和歌集』 一一四二六・雑上・為久)など、「塵の世」の方が多く見られる。『歌ことば歌枕大辞典』に、「塵」を含む歌語は漢語由来のものが多くという指摘がある。「塵の世」も漢語「塵世」に由来すると考えられる。「塵世」は、『遺老説伝』 一〇三話に「已に塵世の三十三代を経れば」の例がある。 23 そのほと／＼のよしあし 「ほと／＼」は殆ど、「よしあし」は毛盛昌の葬儀に参加した貴賤の人たちで、「貴となく賤となく睦びふかりしかば」に対応するか。

(小此木敏明)

二十

〈本文〉

爰にわがをほきみ

¹伊是名筑登之親雲上

²尚敬尊君は、いにしへ唐虞三代の聖^(ひ)の跡をしたはせ給ふ御心から、万

機の政事、美⁵尽せ善³尽させ給ひしかば、万民 聖恩⁶に沐^(も)して、おの／＼

その所を得ずといふものなし。千代歳とあふぎ願ひ奉りしを、乾隆三

五庚午の夏さ月の初比より、御不⁸予の御事と聞えさせ給へしを、いと

ひさしく御本復の御いろも見えさせ給はねば、諸人恐れおどろきて、胸をこがし侍りしに、おなじく二八、歳^(は)辛未にやどれる春正月廿九日丁卯 御寿¹⁰五十二にして、朝^(あ)たの露と共に崩御し給へしかば、世上日月の明を隠し、闇夜に灯火をうしなふ心地して、山野にまじはる賤人までも、考^(こう)妣^(ひ)を喪^(う)ふことくなきかなしむ事切なり。まして世にある

諸民をや。御中蔭¹³の程、天氣さへ打曇りて、なみだの雨をふりしかば、上天にも御なごりをやおしめ給ふらんと、いとあはれなり。二月五日癸酉の日には、この世を捨て給へて、冥途の御旅におもむかせ給ふ御有様、拝み奉るもけふをかぎりとおもふから、たえがたくて

おもひきやも、の民草ふりすて、よみぢの旅に御幸^(みゆき)なるとは

むかしより、よみぢの旅は南無阿弥陀仏を頼み奉るよしきこえ侍りしま、七¹⁷の其御日毎に、六¹⁸字を五文字の頭に置いてよめる

なつかしや雨露^(うろ)の恵みに榮えてし民の草葉もなびきてぞなくむかしより有^(あり)ともなみのあはれさをよるべおしへよ彼岸の本^{(かたきし)(もと)}

あはれとも、の民草打なびきなみだの露にぬる、けふかなみるたびに涙に曇る月かげもてりし給へや死出の山ぢは

たれも見よ本の心は梓弓引てかへらん夢²⁰の世の中

ふた、びとかへらぬ道の御幸ぞとむかひ給へやかしこの岸に

つ、めどもあまる涙の袖の露あはれみ給へ南無阿弥陀仏

百千^{22(も)ちんひ}度ぬれてふされぬ白妙の袖もいつしかいろにそめてき

〈口語訳〉

伊是名筑登之親雲上

さて、我が国王尚敬尊君は、いにしえの唐虞三代の聖人の前例をご師事なさるお気持ちから、国王の治政は美を極め、善を極めなさったので、万民は国王の恵みを受けて、それぞれが望んだ境遇を得ないものはない。(尚敬王の世が)千年と続くことを頼み願ひ申し上げていたが、乾隆十五年(一七五〇)庚午の夏、五月の初め頃から、ご病氣のご様子だと申し上げなされていたが、とても長くご快復のお兆しも見えなさらないので、多くの人々は恐れ驚いて、思い煩いました。が、同じく乾隆の十六年(一七五一)、歳星(木星)が辛未に宿っている春

の正月二十九日丁卯、御年五十二にて、朝露とともに崩御なさったので、世の太陽や月は光を隠し、闇夜に灯火を失う心地がして、山野に隠れる賤者までも、亡き父母を失うように泣き悲しむこと切実であった。まして、世に暮らす民のことは言うまでもない。ご中陰(四十九日)の間は天氣までも曇り、涙のごとき雨が降ったので、天もお名残を惜しみなさっているのだろうかと、とても悲しい。二月五日癸酉の日には、尚敬王がこの世をお捨てなさって、死後の世界へお旅立ちなさるご様子は、拝み申し上げるのも今日限りだとの思いから、耐えがたくて詠んだ歌に、

思ったことがあったらうか、尚敬王が多くの民たちをお見捨てになつて、あの世への旅に行幸なさるとは。

昔から、あの世への旅は、南無阿弥陀仏の名号を頼り申し上げるということを耳にしていますので、七日ごとのご供養の日に、名号の六文字を初句の五文字の頭に置いて詠んだ歌に、

好ましいことよ、雨露の恵みのごとき尚敬王の恩恵によつて繁榮してきた民草は、草葉が風に靡くように一斉に伏して泣いている。

昔からあった思いではないのに、この悲しみをどうすればよいのか。

波が岸に寄るように、身の寄せどころを教えてください、悟りの境地よ。

悲しみを感じて、多くの民草が風に靡くように頭を垂れて、涙のよううな露にぬれる今日であるなあ。

見るたびに涙でかすんでしまう月の光も、強く輝いてくだされよ。

尚敬王が死出の山の険しい山路を進むために。

誰もかれも見なさい。生来の心は、梓弓を引けば弦が戻るように帰ってくるでしょう、夢のようにはかないこの世の中に。

二度とは帰らない道へのお出かけだと思ってお向かいください、死後の世界である向こう岸へ。

顔を覆つてもあふれた涙が袖を濡らしてしまう。憐れんでください、阿弥陀仏よ。

何度も涙に濡れて乾く間のない白妙の袖も、いつのまにか（涙の）色に染まつてしまったことだ。

〔注釈〕

1 伊是名筑登之親雲上 原文では、本文三行目の「尚敬尊君」の右肩に小書きされている。本来は、本文冒頭の「爰にわがをほきみ」の右肩に書かれるべき注記。「尚敬尊君」が平出によって改行されているため、「爰にわがをほきみ」が文章の題、「尚敬尊君」が本文の冒頭と誤解された。そのため、「伊是名筑登之親雲上」の注記が「尚敬尊君」の右肩に書かれたと考えられる。書写者の勘違いによるものと思われる。「伊是名筑登之親雲上」は、上・十話の作者と同一人物か。『宮古島記事仕次』（一七四八年）の著者、伊是名長良の可能性があるとされる（上・十話の注1参照）。2 尚敬尊君 琉球第二尚氏王統第十三代の王。康熙三十九年（一七〇〇）六月十九日生、乾隆十六年（一七五二）一月二十九日没。康熙五十二年（一七二二）に十四歳で即位し、在位は三十九年に及んだ。蔡温を三司官にとりたて、政治・経済・文化などの各方面に業績を残した。平出あり。『浮縄雅文集』収録話の内、尚敬王在位時に書かれたと思われるものは、三・四・五・七・十四・十五・十六・十九・二十一話となる。3 唐虞三代の聖人 上・五話に「唐虞三代の徳」あり。五話の注十三参照。唐虞三代の聖人。「唐虞」は、陶唐氏と有虞氏の略で堯と舜の時代のこと。「三代」は夏・殷・周の時代を指す。4 万機の政事 帝王の政治。上・三話と五話に「万機の政」の例あり。5 美尽せ善尽させ 美しいことと善いことを極めること。孔子が、舜の音楽を批評した言葉に、「子謂韶、尽美矣。又尽善也（子韶を謂ふ、美を尽せり。又善を尽せり）」（『論

語』八佾第三 六十五）とある。日本でも、『太平記』卷第二十一「法勝寺塔炎上事」の「サレバ堂舎ノ構善尽シ美尽セリ」など、よく見られる表現。6 聖恩 天子の恩恵。闕字を用いている。『元史』列伝第五十二「管如徳」に「民沐聖恩多矣」（民、聖恩に沐すること多し）の例あり。7 千代歳 ここでは「ちよのとし」と読んでおくが、照屋論文は「千代万歳」の脱字とする。『宮古嶋記事仕次』に「千代萬歳と祝ひ初めける」の例がある。8 不子 帝王の病。『平家物語』卷第一「額打論」に、「主上御不豫の御事と聞えさせ給ひしが」の例あり。9 歳辛未にやどれる 「歳次辛未」を訓読した表現（「歳^{はし}末に次れる」）。「歳」は歳星（木星）のこと。木星は十二年で天を一周する。中国の天文学では、天を十二次（宿）に分け、その一次を移動する期間を一年とした。その年に木星が所在する宿が干支で表される。10 御寿五十二 尚敬の年齢。闕字を用いている。11 朝たの露 朝露。消えやすいもののたとえとして用いられるが、ここでは単に早朝を指すか。12 考妣を喪ふごとく 堯が没した際の群臣の様子に、「百姓如喪考妣（百姓は考妣に喪するが如く）」（『書経』堯典第十節）とある。「考妣」は、「考」が亡父、「妣」が亡母のこと。13 中陰 「中陰」のこと。中有に同じ。人が死んでから次の生をうけるまでの四十九日間。14 上天 造物主としての天帝の意味もあるが、ここでは単に天空の意味か。15 二月五日癸酉の日 尚敬の没した乾隆十六年（一七五二）の一月は、大の月で三十日まで（『近代陰陽暦対照表』）。没日の二十九日から数えて二月五日は初七日に当たる。16 南無阿弥陀仏 念仏。浄土宗が阿弥陀仏への帰依を表すことば。浄土真宗では名号という。17 七々の其御日毎 四十九日の間の七日目ごと。死後七日目ごとに行う供養を指す。沖縄ではナンカ、中国や日本で七七斎（七七日追福）などと呼ばれる。18 六字を五文字の頭に置いて 上・十五話でも、「六字の歌」として、南無阿弥陀仏を初句の頭

に置いた六首の和歌があつた（上・十五話の注二三参照）。日本でも法要や弔いの意味で行われる。『続千載和歌集』の二〇八〇（二〇九六）番歌の蓮生法師の詞書に「藤原経綱が妻身まかりて後、夢に六字名号をかみにおきて歌をよみてとぶらへとみえ侍りけるとて」とある。また、鵜殿余野子（一二七九～一七八八年）の『佐保川』でも、「常に仏の御名をとなへ給ひしかば六字を上におきて、御三七日に」（一〇〇～一〇五番歌の詞書）の例がある。また、下冷泉政為の『碧玉集』では、「六字の名号」（一三一八番歌の詞書）や「名号和歌」（一三二三番歌の詞書）として同様の例がある。連歌にも「名号連歌」（『当風連歌秘事』）がある。19 なみ 「無み」で、形容詞「なし」の語幹に接尾語の「み」が付いた形。20 夢の世の中 「夢の世」は、平安中期から用いられる歌語。夢のようにはない現世の意。この歌語の発生には、『維摩経』（方便品）の「是身如夢、為虚妄見」などの、維摩経十譬の影響があるとされる（川村晃光「夢の世」『歌ことば歌枕大辞典』）。21 つゝめどもあまる涙の 『袋草紙』に「つつめどもあまるなみだはもろやまのなげきにおつるしづくなりけり」（五三〇・忠隆）がある。22 百千度 南無阿弥陀仏の六字を歌の頭に置くとあつたが、本歌は七首目。冒頭が「百」なのは、弥陀の名号を繰り返し唱えることを表すか。死者への追善として、名号を百万回唱える百万遍念仏がある。23 ふされぬ 「ほされぬ」（乾されぬ）の琉球方言。涙の乾く間もないこと。

（小此木敏明）

二十一

〈本文〉

曹氏のきみ、身まかり給ひて十三回忌の法事をこなはれけるに、下官

等も師友のよしみあるによりて、かの御³よかりのかたより吊人の数にくはへられしに、御こゝろざしをかんじ、ませし世のことゝも、いと思ひいでられて、かなしさのあまりに、与所の嘲をかへり見ず、愚⁵かなる言の葉をなん、書奉るものならし。

奥川筑登之親雲上

めぐりあふ月日もつらし小車のわかれし人はまたもかへらず

別れにしむかし⁸のけふをわすれずはこけの下にも袖ぬらすらん¹⁰ 与儀筑登之親雲上

わかれけるその年月のめぐり来ていと¹¹たちそふ人のおもかげ 親泊筑登之親雲上

かくてなほ跡をしたふとらめしやあかず^{（なれ）}馴にし人にをくれて 高嶺筑登之親雲上

けふは猶袖こそぬるれなき人のありしむかしをしのぶなみだに 比嘉筑登之

なれ¹³くしそのおもかげを思ひ出てしのぶなみだに袖ぞしほる、 屋良筑登之

その人のあらましかばと思ひいで、いとゝむかしをしのぶけふかなかのきしにこぎわたれにし友¹⁵ぶねのかへらぬなみに袖ぞしほる、かしこしなたかきその名を残しをきてなきあとまでもしのばる、身は

〈口語訳〉

曹氏（平敷慶隆か）がお亡くなりになって十三回忌の法事が行われた際、私なども（平敷を）師とし友人とすると関係により、その（平敷の）ゆかりある人から弔問の人数に加えられたところ、お気持ちを感じ、（平敷が）御存命であった頃のことなどがとても思いだされて、悲しさのあまりに、他人に嘲笑われることを顧みずに、拙い歌を

書き奉るものである。

奥川筑登之親雲上

廻ってくる月日が辛い。牛車に乗って去るように別れた人は（月日がどれだけ廻っても）またも帰っては来ないので。

別れてしまったあの年の今日のことをあなたは忘れずに、墓の中で袖を濡らしているのだろう。

与儀筑登之親雲上

別れたその年月が廻って来て、いつそう立ち上がってくる故人の面影である。

親泊筑登之親雲上

こうしてなおも足跡を慕うのはうらめしいことだ。飽きることなく馴れ親しんだ人に先立たれてしまった。

高嶺筑登之親雲上

今日はいっそう袖が濡れることである。故人が生きていた昔を偲ぶ涙で。

比嘉筑登之

馴れ親しんだその面影を思い出して偲ぶ涙で袖が濡れているのである。

屋良筑登之

その人が生きていたらと思い出して、とても昔を偲ぶ今日であるよ。彼岸へと漕ぎ渡ってしまった友船は帰って来ない。返ることない波に袖は濡れているのだ。

畏れ多いことである。評判高い名を残し、亡くなった後までも偲ばれるあなたは。

〔注釈〕

1 曹氏のきみ 平敷慶隆のことか（池宮正治『近世沖繩の肖像』

上）。唐名は曹範。平敷については十六話参照。 2 十三回忌の法事

平敷慶隆は康熙四十五年（一七〇六）に五十六歳で死去。十六話によると、十三回忌の法事が行われたのは康熙五十六年（一七一七）十二月である。 3 御よかり「よかり」は「ゆかり」（縁）のことである。 4 ませし世 いらっしやった時。御存命の時。 5 愚かなる「愚なる」に「か」を傍記してある。 6 奥川筑登之親雲上

不詳。十八世紀には奥川筑登之親雲上忠昆という人物が確認される（『伊氏家譜』『那覇市史資料篇』第1巻8）。 7 小車 牛車。小車

が詠まれた和歌に「小車のわかれはあまたなれしかどこの暁ぞやるかたもなき」（『新葉和歌集』恋歌三・入道前関白左大臣・八六一）など

がある。人を乗せて去る小車は別れを連想させるものとして詠まれたのだろう。 8 むかしのけふ かつての年の今日に当たる日。ここ

では平敷慶隆が死去した十二年前の今日という意味。 9 わすれずは 忘れないで。「ずは」は打消の助動詞「ず」に係助詞「は」が付いたもの。なお、この和歌と似た発想の歌として「雪ふかき苔の下にも

わすれずはとふべき人の跡やまつらん」（『続拾遺和歌集』雑歌下・良心法師・一三一一）がある。 10 与儀筑登之親雲上 不詳。康熙年

間には与儀里之子親雲上守正（阿保業）という人物が確認される（『那覇市史資料篇』第1巻8）。池宮正治は与儀朝昌を想定している（『近

世沖繩の肖像』上）。 11 いとゞたちそふ人のおもかげ この表現が

用いられた和歌に、藤原定家の「たびねするあらし浜辺の波の音にいとどたちそふ人のおもかげ」（『拾遺愚草』上・五七七）がある。 12

親泊筑登之親雲上 親泊直増（一六七七〜一七三四年）か。平敷屋・友寄事件に連座して処刑された（『近世沖繩の肖像』上）。 13 屋良

筑登之 屋良宣易か。上・十四話の注1参照。 14 いとゞむかしを

しのぶけふかな 類似した表現を用いた和歌として「わがきみをいきぞなくしのさにときていとどむかしをこふるけふかな」（『行尊大僧正

集』一九七）がある。 15 友ぶね 友船。共に航行する船、また、同じ船に乗ること。ここでは友が乗っている船という意味もあるか。「友船のこぎわかれ行くいがしまのこるかたみの浦ぞさびしき」（『宝治百首』基良・三五二三）のように和歌に詠まれた。

（屋良健一郎）

二十二

〈本文〉

春のけしきの面白さにさそはれ、思ふどち、そこはかとなくながめ、あがめ侍りしに、あふきましとかやいへるところにいたり、よしありげなる塚に、一木の桜の、色ごとに咲たるを見過しがたくて、「たがなきあとのしるしぞ」と、よすがのものに問へば、「小祿氏なりける御児の、さい比身まかり給ひしを、をさめはふむりしところにてあんなり。これなるさくらは、なき人の常に愛給ひけんものなれば、さこそ苔の下にもゆかしくおぼすらんとて、御ゆかりの方より植おかれたる」といふに、さてとおぼえて、あはれになつかしく袖も露けし。実にや、いけるものかならず死することはりなれば、さのみおどろくべきにあねど、御としもまだいと若うて、つばめるはなのやうなりしを、苔の下にひとり打すて、さらぬ別になしはてぬるものがなしさよ。返すも他人ぞかし。つかに向て問はまほしきひとふしもあれど、花ものをいはねばいかせん。せめての余に、かくなんよみ侍りし。あだし世のはるのかたみと見るからにはなにも涙ぞ、ぐけふかな此一卷くりかへしく、優にあはれに拝吟いたし、かんにたへずしてかくなん筆にまかす。

〈口語訳〉

春の景色のすばらしに誘われて、親しい人たちと、どこということもなく眺めたり尊んだりしていましたが、「あふきまし」とかいう場所に至ると、いわくありげな塚に、一本の桜で、色がことさらすばらしく咲いているのを見過ごし難くて、「誰が亡くなった跡の目印か」と、友人に問えば、「小祿氏だというお子さまが、先頃お亡くなりになったのを埋葬した場所だということです。この桜は、亡くなった子がいつもご賞翫なさっていたというもので、きつと墓の下でも見たいと思うだろうと言って、御親族の方によって植えられた」と言うので、ああと思いついて、しみじみと懐かしく、袖も涙の露にぬれている。本当にまあ、生きているものは必ず死んでしまう道理なので、さして驚くべきことではないが、お歳もまだとても若くて、つぼんでいる花のようであったのを、墓の下に一人だけ置き去りにして、死に別れてしまうもの悲しさよ。重々、（亡くなった子が）身内ではないことは分かっているのだ。塚に向かって問いたい気がかりがあつても、桜の花はものを言わないのでどうしようもない。痛切な思いのあまりに、このように歌を詠みました。

（亡くなった子が）無常のこの世に残した、春を思い出させる形見だと分かったので、一目見るだけで桜の花にも涙をそそいでしまう今日であることよ。

この一卷を何度も繰り返し、優美に哀感を込めて吟唱させていただし、感情を押さえられずに、このように筆の勢いに任せて書いた。

〈注釈〉

1 あふきまし 不詳。比較的近い例としては、「越布機枝（おふきし）」がある。新垣の小字にある「大きし」が出典とされる（東恩納寛惇『南島風土記』）。 2 よすがのもの 頼りとする者。血縁者を指

二十三

〈本文〉

¹ 盆石の記

² 日高次左衛門

一吉く。此盆石、地からはへたる浮島か、雲慶が細工か、丹後が作³か。しかも二尺にたらずして、遠山の面影そなはり、植し一木の松枝⁴たれて、千とせのみどりをふくみ、打向ふとき、⁵ 気の鬱事も七里の外に散し、⁶ 酒力・女色をからずして人情を慰⁷ること、たとひをとるにものなし。⁸ 彼は取集ていはず、ずんどたからく、ずんどたからとい⁹はましかし。¹⁰

〈口語訳〉

盆石の記

日高次左衛門

一吉一吉。この盆石は大地から生じた浮島か、雲慶の細工したものか、丹後の作品か（と見紛うほどだ）。その上、二尺（約六十cm）にも満たないのに、遠方に見える山の面影が備わっており、植えた一本の松の枝が垂れ下がり、千年を経ても変わらない緑の色を帯び、盆石に向かうと、鬱積した気も七里四方の外側へ霧散させ、酒の力や女の色香を借りずに人の心を和やかにことは、他に例えるものもない。あれこれひとまとめにして言えば、（この盆石は）たいそうな宝、たいそうな宝、たいそうな宝だと言いえよう。

す場合もあるが、ここでは一緒に散策に出た親しい人たちの内の一人を指す。 3 小禄氏 特定できず。小禄御殿を称した家には、尚真王の長子朝満を元祖とする向氏大宗家や、大浦添親方良憲を元祖とする首里馬氏の大宗家などがある（『沖縄姓氏家系大辞典』）。地名としては小禄間切小禄村がある。「小禄郡」（間切）は、尚貞王五年（一六七三）に「真和志郡内三邑」と「豊見城郡八邑」を合わせて置かれ、向熙（金武王子朝興）と毛文祥（小禄親方盛聖）に与えられた。また、後に新設の四邑と合わせて十五邑となったとある（『球陽』巻七 四六六）。 4 さい比 「さき比」（先比）か。 5 袖も露けし 和歌的表現。「わがやどのはぎのした葉のいかならんそでもつゆけしはつかりのこゑ」（『千五百番歌合』一一一九）などの例がある。 6 つぼめるはなのゝものがなしさよ 本書十七話に、「はなのやうなりし御ちごを、苔の下にひとりうちすて、さらぬ別になしはてぬるなん」という類似表現あり。 7 返すくも他人ぞかし 文意が通りにくい。小禄氏の子は自分にとって身内ではないが、それでも深く悲しんでいるということか。 8 ひとふし 気にかかる事。 9 せめての余に 「せめての思のあまりにや」（『平家物語』巻八「山門御幸」）、「せめての事のあまりにや」（謡曲『俊寛』）などを縮めた表現か。「せめて」は痛切な。 10 あだし世のゝそぐけふかな 形見として植えた花を見て涙する歌に、「見るからに袖ぞひちぬるなき人のかたみにみよとうゑし花かは」（『河海抄』「幻」巻）がある。「はるのかたみ」は、通常、春を思い出させるもので、「わがやどのやへ山吹はひとへだにちりのこらなんはるのかたみに」（『拾遺和歌集』七十二）などのように、多くの和歌に詠まれる。 11 此一巻くりかへしく、優にあはれに拝吟いたし 十八話に、「此一巻におさく書つゞくり給ふ御ことばのしなぐ、ゆうにあはれに拝吟して」という類似の表現がある。「此一巻」は、前出の和歌一首を指すか。

〈注釈〉

1 盆石 盆山とも。上・六話の注1を参照。 2 日高次左衛門 源為一（日高治左衛門）か。上・十三話の注5を参照。没年は一七三三年とされる（田中道雄他「作者略伝」『松操和歌集 本文と研究』）。薩摩の画家、木村探元（一六七九～一七六七年）が著した『三暎庵主談話』に、「日高治左衛門為一雅文は竹の内惟康卿へ職原并歌道も御指南を被受候」とある。「惟康」は「惟庸」の誤りか。竹内惟庸（一六四〇～一七〇四年）は堂上歌人で極官は従二位。地方に門人が多数おり、和歌の添削を行っていた。惟庸らに添削を受けていた地下歌人のグループの歌集に『細江草』などがある（上野洋三「細江草」『日本古典文学大辞典 五』）。為一の和歌は、薩摩で編纂された『松操和歌集』に複数載る。 3 一吉く 不詳。上・十話の注2に既出。十話は盆石についてのものではなく、「節月亭」の庭園を賛美した文章。作者は異なるが、「一吉く」という書き出しと末尾に、同様の表現が用いられている（注10参照）。盆石などを称賛する際の決まり文句か。 4 から「より」を見せ消ちで訂正して「から」とする。 5 はへ「生じ」の意味だとすれば、「はえ」（生え）とあるべきところ。 6 雲慶が細工「が」は補入。「雲慶」は、平安末から鎌倉期に活動した仏師の運慶のことか。『吾妻鏡』『古今著聞集』など、運慶を「雲慶」と表記するものがある。 7 丹後が作 不詳。あるいは、丹後地方で産出される絹織物の作の意か。丹後縞などで知られた。 8 千とせのみどりをふくみ 千年たっても変わらない緑の色を帯びている松の意。同様の表現に「松色含千年之緑（松の色は千年の緑を含み）」（『将門記』）や、「松も千年の緑にて」（謡曲『花筐』）などの例がある。 9 気の鬱事も七里の外に散し 室町末から江戸時代を通じて伝えられた「盆山十徳」の一つに、「心を澄まして穢無なし」とある（丸島秀夫「日本盆栽盆石史考」）。「七里」は、七里四方に魔を入れないという七里結

界に由来する表現。空海が高野山に張ったといわれる。『性霊集』に「諸悪鬼神等。皆悉出去我結界之処。七里之外。（諸の悪鬼神等、皆悉く我が結界の処、七里の外に出で去れ）」（高野建立壇場結界敬白文一首）の例がある。また、山崎美成（一七九六～一八五六年）は、忌み嫌うことがあった場合、「七里けつぱいよせつけぬ」などというのも、七里結界の転訛だとする（「七里けつぱい」『三養雜記』）。10 彼は取集てゝいはましかし 上・十話に同様の表現がある。「ずんど」は上・十話の注21参照。

（小此木敏明）

二十四

〈本文〉

美里里之子親雲上¹
梁氏外間親雲上²は、文道のたしなみありて、月花をもめで給ふ人なり。常に盆石³をすかせ給ひて、床上に飾られ、是を見給ひて御心を慰められけるとなん。ある日、此石を題にて唐土の歌を詠ぜられつるとて、下官に送られけるを見るに、「海山の景色其石に籠りて、まろうどの声雅の興をも催しければ、棹姫のかざしの花の色々を粧ひなせずとも」とあるを、さながら見る心地すれば、盛の余りにかくなん。
海山のゆききも雲もその石によせ来る船を見るこ、ちして

〈口語訳〉

美里里之子親雲上
梁氏外間親雲上は、学芸を日々心がけ、風流なものをも愛でなさる人である。ふだん、盆石をお好みなさって、床の間にお飾りになり、それをご覧になってお心をお慰めになっているという。ある日、その

盆石を題にして漢詩をお詠みになられたということで、私にお送りに
なったものを見ると、「海山の景色がその盆石に含まれていて、来客の
風流の興を催したが、佐保姫が髪に挿す様々な花のように（盆石を）
飾らなくとも」という内容が書かれてあったのを、まるで（その盆石）
を見る心持ちがしたので、感動のあまりにこのように和歌を詠んだ。

海と山を行き来する雲を眺めていても、その（島のような）盆石に
向かって来る船を見ている心地がして。

〔注釈〕

- 1 美里里之子親雲上 特定できず。照屋論文は、毛鴻基（嵩原里之
子親雲上安庸）かとする。安庸（一七七四―一八三六年）は、新城親
方安基の六世嵩原親方安依を系祖とする毛氏美里家の十二世（『毛姓家
譜（美里家）』）。他家の家譜を加えると、同氏の一族で美里里之子親雲
上を名乗った人物に九世安升の四男安勅（『麻姓家譜（西原家）』十三
世麻土弘）、十世安春の長男安執（『向姓家譜（伊江家）』八世朝藩）、
次男安良（『毛姓家譜（美里家）』十一世安執）らがいる。
- 2 梁氏
外間親雲上 特定できず。久米村系の梁氏か。梁守徳を元祖とし、四
世得志に始まる梁氏小宗（阿嘉家）がある。得志は、父の珍材が外間
親雲上であったため、外間通事親雲上を称した（『沖繩姓氏家系大辞
典』）。得志は康熙五十七年（一七一八）に三十五歳で没している（『梁
姓家譜（小宗）』）。
- 3 盆石 二十三話の注1参照。
- 4 床上 押
し板（厚い板を取りつけた床）、床の間か。盆石なども飾られた。
- 5 唐土の歌 漢詩。『源氏物語』「桐壺」巻に「大和言の葉をも、唐土の
詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ」の例あり。五山僧など
が、盆栽を詠んだ漢詩は複数ある（丸島秀夫『日本盆栽盆石史考』）。
- 6 声雅の興 漢詩を歌ったりする風流な興趣の意か。『雅興』（がきよ
う）で風流な趣。
- 7 棹姫の「棹姫」は佐保姫とも。佐保山の神格

化で、春の女神。

（小此木敏明）

二十五

〔本文〕

島津矢柄¹

さりぬる宝曆二の年、君の仰ごとありて此国にわたりしに、げにや月
日のなりゆくは矢のごとくにて、時不待人³、三年の春も過てはや五月
雨の比しもや、とゞまる日数もしばしにて、嬉し名残のはかなさ、雲
井になく時鳥、田面の蛙の声を聞ても常ざまの興に似ず。時に感じて
花にも涙を濺ぎ、鳥がねも別れよとはななざりき。おもひある身に
聞ばこそ我ためにやとおもひぬ。三年の中にあひなれし人々に出船の
折にふれては、たちひに言葉も尽しえず。せめて若木の人たちは心づ
くしの春にきて、はなの元にしもかたりなん。老蘇の森に住人に又逢⁹
ことのなかりせば、風の便りに筆の跡を面影にやうつし見んとおもへ
ば、しきりに胸つぶれ、せきあへぬ涙の瀧に袖をしぼる。昔は物を思
はじといひしことをも、今身のうへ、生は死のもと、逢はわかれの定
あれど、さむさ来ぬれば身にしむと読おく人の心こそ、げに誠ある言
ばならめ。故郷を出る年なみは、又たちかへるよるべにて、かくまで
名残なかりしが、（「」の別れのせきなさ、何にたとへん。かた糸のよ
るくごと）に弥増り、涙の玉を豎横につらぬきとめて、織はたものた
ち切る孟母の御心ばへ、かしこき教の流を汲て、我為の吹毛の剣とお
もひ出し、来たらずさらずといひ置くふかし言葉をちからにして、別
離の心をのべ侍りぬ。

なれくし三とせの契りわすれじな心づくしにかへる身なれど

〈口語訳〉

島津矢柄

去った宝暦二年（一七五二）、主君のご命令があつてこの国（琉球）に渡つたのだが、実に月日の過ぎるのは矢のようで、時は人を待たず、（琉球に来て）三年目の春も過ぎて、はや五月雨の時期である。滞在する日数も少なくなつて、惜別のはかなさは、空になくホトトギスや、田の面の蛙の声を聞いてもいつもの趣とは異なっている。時に感じて花にも涙を注ぎ、鳥の声も「別れよ」というふうには鳴かなかつた。物思いのある身で聞くからこそ、私のために（鳥が「別れよ」とは鳴かない）なのだろうかと思つた。この三年のうちに親しくした人々に、出船の時には、互いにいろいろ言うことはできない。せめて若木のように若い人達は、いろいろ気をもむ春にやつて来て、花のもとでも語り合うことにしよう。老蘇の森に住む老人とは再び逢うことがなかつたとしたら、ちよつとしたついでに、筆跡を面影として写してみようと思つたところ、とても胸がしめつけられ、抑えることのできない激しい涙に濡れた袖をしぼるのである。「昔は物を思わなかつた」という和歌ではないが、昔は「思い悩むまい」と言つたことなども、今は我が身のこと、生は死のもとであつて、逢うことは別れることという定めがあるが、「寒さが来たので身にしみる」と詠んだ人（一遍）の心こそ、実に誠実な言葉であろう。故郷を出る年波（歳月）というのは、波が返すように（故郷に）帰るあてがあることなので、こうまで名残はなかつたが、「」の別れのせつなさは、何にたとえよう。片糸を縫り合わせるようにせつなさがますます大きくなり、涙の玉を縦横につらぬきとめ、織物を裁ち切る孟母の才気は、尊い教えの流れを汲んでいて、私のための鋭利な剣とも思い、来たらず、去らず、と言いつく奥深い言葉を力にして、別離の心を述べました。

馴れ親しんだ三年のつながりを忘れないだろうと思ひ悩みながら帰る

身ではあるが

〈注釈〉

1 島津矢柄 島津久壽。宝暦二年（一七五二）二月四日から同四年（一七五四）三月まで琉球在番奉行を務めた（徳永和喜『薩摩藩対外交渉史の研究』）。天保十三年（一八四二）二月から弘化二年（一八四五）六月まで在番奉行を務めた汾陽次郎右衛門光明に宛てて、弘化二年十月（汾陽の帰国後）に琉球の官人である吉元親雲上宗応が出した書状に島津矢柄の名が見える。それによると、「貴公様爰元御在勤中は（中略）御取合の面々惣而御慈愛被成下、（中略）むかし御在番奉行島津矢柄様、中比梅田九左衛門様、差次貴公様と世評有之候」とある（黒田安雄「藩政改革と対外的危機―汾陽文書の紹介―」。すなわち、汾陽光明が在番奉行の期間中に、職務上、関係した琉球の人々（御取合の面々）と親密な関係を築き、琉球では、島津矢柄、梅田九左衛門（文政三年から同五年まで在番奉行）と並んで汾陽が評判だといふのである。このことから、近世を通じて数多く赴任した在番奉行の中でも特筆されるほど島津矢柄が琉球の官人から高い評価を得ていたことが分かる。在番奉行の期間に築かれた信頼関係が、『浮縄雅文集』所収の島津矢柄の和文が生まれる背景にあったのだろう。

2 君の仰ごとありて此国にわたり 薩摩藩主の命により、在番奉行として琉球に赴任したことを指す。「君」は寛延二年（一七四九）から宝暦五年（一七五五）まで藩主であつた島津重年を指す。在番奉行の任期は「琉球詰二十八ヶ月」（『藩法集』8 鹿兒島藩）下、四三（一五）と定められており、三年任期が多かつた。また、渡航時期については、季節風の関係で、薩摩から琉球に渡るのは二月・三月、あるいは九月・十月（年によつては十一月初旬まで）、琉球から薩摩に戻るのは五月から七月（閏年は八月上旬まで）が適切な時期とされていた（徳永和喜『薩摩藩対

外交渉史の研究」)。3 時不待人 中国の禪僧である北磻居簡(一六四―二四六年)の行状をその法嗣である物初大観(一二〇一―一二六八年)が撰した「北磻禪師行状」に「時不待人、以道自勵」(時、人を待たず。道を以て自ら励ませ)という語が見える(石井修道「中国の五山十刹制度の基礎的研究(四)」)。また、道元の伝記にも「生死事大、無常迅速、時不待人、去生必悔」とある(吉田道興「道元禪師伝記史料集成(二)」)。時の過ぎ去ることの早さを示す語として、特に禪僧の間でよく用いられたようである。4 三年の春も過てはや

五月雨の比しもや 島津矢柄の在番奉行の任期は宝暦四年三月までだったが、風の関係などで五月になつてもまだ琉球にいたのだろう。「比しも」は、ちょうどその頃。「し」は強意、「も」は感動の助詞。5 時

に感じてゝなかざりき 杜甫の「春望」の「国破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心」(国破れて山河在り。城、春にして草木深し。時に感じては花にも涙を濺ぎ、別れを恨んでは鳥にも心を驚かす)を踏まえているのだろう。「鳥がねも別れよとはなかざりき」の部分は、あるいは菅原道真が筑紫へ配流される途中に河内国道明寺で詠んだとされる「鳴けばこそ別れをいそげ鳥の音の聞こえぬ里の暁もがな」を踏まえている可能性もあるか。この和歌については「和漢三才図会」巻七五(河内)に記述がある。また、『菅原伝授手習鑑』、延宝七年刊の『河内鑑名所記』、元禄十年刊の『国花万葉記』などに見える(松崎

仁「天神伝説と演劇」)。6 三年の中にあひなれし人々 在番奉行

の任期中に親しんだ人々。「あひなれ」は「相馴れ」。7 たちひに「たがひに」(互いに)の誤記であろう(照屋論文)。8 若木 生え

てからあまり年数のたつてない木。「若木の人たち」は、この後の「老蘇の森の住人」と対になっている。9 心づくし いろいろ気をもむこと。心労。10 老蘇の森 滋賀県安土町の奥石神社の森。ホト

トギスの名所として知られ、歌枕でもある。ここでは「老蘇の森に住

人」で老人を指している。11 せきあへぬ涙の瀧 「せきあう(塞

敢)は、流れ出るものをおさえて我慢すること。「涙の瀧」は、涙が激しく流れるさま。12 昔は物を思はじ 『百人一首』四三番の「あ

ひみての後の心にくらぶればむかしは物をおもはざりけり」(藤原敦忠)の歌を踏まえているのだろう(なお、『拾遺集』では四句は「昔は物も」。同歌の派生歌として『新明題和歌集』所収の「うしや今昔は物をとばかりの思ひをあかぬ中にわすれて」(頼孝)、「今まではむかしは物をとばかりも恨みぬ身をば恨みやせん」(後水尾院)などがある。13 逢はわかれの定 「会うは別れの始め」と同義。「法華経」譬喻品に「愛別離苦、是故会者定離」、「白氏文集」巻一四に「合者離之始、樂兮憂所伏」とあり、会ったものとはいつか必ず別れるものだという、人生の無常を説くことわざ。14 さむさ来ぬれば身にしむと読おく人 一遍。「捨て果てて身は無きものと思ひしに寒さ来ぬれば風ぞ身に染む」と詠んだという。15 故郷を出る年なみは、又たちかへるよるべにて 故郷を出てもまたいずれ戻れることを、波が寄せ

ては返す様子と掛けている。16 かた糸のよるくことに 「かた糸(片糸)」は、二本の糸を縫い合わせて一本の糸にするときの、縫い合わせる前の一本の糸のこと。「かた糸の」が「よる」に掛かる枕詞。

17 織はたものたち切る孟母の御心ばへ 孟子が学業の途中で師のもとから戻った時、機を織っていた母(孟母)が、刀で機の糸を切り、

学業を途中でやめることは織りかけのものを切るようなものだとか戒めた故事を指す。断機の戒め。18 吹毛の剣 吹きかけた小さな毛をも切る剣。非常に鋭利な剣。19 来たらずさらず 不來不去のこと

か。不來不去とは、来るわけでも去るわけでもないことを指す語(『例文仏教語大辞典』)。20 ふかし 「き」脱か(照屋論文)。ふかしき(深しき)。

二十六

《本文》

御同人

去年の春、国の守仰²ごとありて此国に渡りしが、させるわざもなくて日をかぞへ、月を重て、今日のはや宝暦三の年始、そのふに馴し鶯の初音はそれと聞ねども、四方の景色のうら、かにいと春めきて見えぬれば、おもふどち伴ひ、那覇のみなとを漕渡り、小禄といへる所にまかり、いづくをあてどに定めねば、たどりく行道の、山田の早苗もえ出て、賤夫のいとなみ障もなし。我故郷の田面にはまだ苗代もまもなくに、八重の潮路を隔来て、みるにつけても聞からもわきて替るは四季ぞかし。かく詠^{（よ）}め行折からに、長閑き空の打曇り、しづく雨の降くるは、袖ぬれつゝも面白し。しばしはひざを休めん、笠やどりもやありなんと、このもかのもを尋ぬるに、爰はますみの鏡洲とて、虎伏野とも見し中に、一つの草の庵を結び、外圍には松林常盤の色をあらはし、風雅の亭とみえ、「誰人の住るぞ」とかたへの人に問ひぬれば、粟国雅丈の別墅^{（べいしょ）}となんおしへあり。人里遠き鄙の地にかゝる庵の有ことは、藪^{（やぶ）}の中にも咲梅の、色にはさまで見えねども、香やはかくる、事ぞなき、内の住居の床しくて、庵の守りに案内し、打入見れば、庭の面、わざとならぬいはほの山、高からずひくからず、苔むし見えてふるめかし。みぎりには松竹生茂り千世を経ぬべき面影、蘇鉄、あだに、桃などもみえ、仙境にやとうたがひ、七の賢き人たちも、遊び給はん所なり。軒には安歛亭と額を掛、雅丈暇の折々は此所にあゆみをはこび、うさをはらし給ふとぞ。扱、庵より四方をみるに、先、南には当間、赤嶺、安次嶺、引続き、山の姿、岡のはへ、見所多く侍りぬ。尚はるけく山眉のほめく見えしは、青柳の糸満といへる所也。目

路近くは、洲長の名山、大嶺の村、西のかたへにつゞきしは、波路隔て、慶良間島、となき、けい島浮ならび、浪に匍匐^{（もづく）}のその容、睡れる龍によそへつべし。沖を遙に見渡せば、其はてもなく有蘇海、見ぬ唐土のかたとかや。北に遠くは読谷山、近くは泊り、那覇の津に、出入舟の絶間なく、真帆引懸て行かふは、八つ景にもたとふべし。磯辺に近く海人に小舟、世渡るわざか、波のうねにみえかくれるありさまは、名におふ絵師も筆を捨^{（す）}べき。仰げばかしき山の形、見おるせばみぎはの真砂、かぞへがたくも千々の景、肝に入、骨に染、書^{（か）}ども筆はしりかね、なにはのことも云しらず、よしあしの柄をさし置ぬ。もの毎にうつらぬ影もなかりけりみるにはてなき鏡洲の庵

《口語訳》

去年（宝暦二年）の春、薩摩藩主のご命令があり、この国（琉球）に渡ったが、さほどの出来事もないままに日を過ごし、月を重ねて、今日は早くも宝暦三年（一七五三）の年始である。庭に馴染んだ鶯の初音はそれだと聞いたわけではないが、四方の景色はうららかでとても春めいて見えたので、仲間を伴い、那覇の港から漕ぎ渡り、小禄という所に行き、どこも行先に定めていなかったところ、たどりながら行く道には、山間の田の早苗が萌え出ている、庶民の生業に差し障りもない。私の故郷の田の面にはまだ苗もまいていない頃なのに、はるかな海路を隔てた地に来て、見るにつけても聞いても、とりわけ異なるのは四季である。このように眺めて行くときに、のどかな空が曇り、静かに雨が降りくるのは、袖を濡らしながらも趣がある。しばらくは膝を休めよう、雨宿りもいいだろう、とあちこちを訪ねたところ、ここはますみの鏡ではないが鏡洲というところで、虎が伏しているような野とも思えた中に、一つの庵を結んで、外の囲いには松林がずっと変わることのない色を示し、風雅のある亭にも見えて、「誰が住んでい

るのだ」と、そばの人に問うたところ、栗国雅丈の別荘であるとの答えであった。人里を遠く離れた鄙の地にこのような庵があることは、藪の中に咲く花の様子はそれほど見えなくても、香りは隠れることがない、というようなものである。内側の住居も見てみたか思い、庵を守っている者に案内をせよと入って見れば庭の面は自然な様子の岩山が、高くもなく低くもなく、苔がむしっていて古めかしい。水辺には松や竹が生い茂り、長い年月を経たであろう面影がして、蘇鉄、阿檀^{あだん}、桃なども見え、仙境ではと疑い、七人の賢者たちも楽しみなさるような場所である。軒には安歓亭と額を掛け、栗国雅丈が時間のあつた時にはここに足を運び、憂さをはらしなさることである。さて、庵から四方を見ると、まず、南には当間、赤嶺、安次嶺が続き、山の姿、岡のはなやかな見た目、見所が多くある。なお、はるか遠くに美しい眉のような山がほのかに見えたのは、青柳の糸ではないが、糸満という地である。視界の近くには瀬長の名山、大嶺村、西のそばに続いたのは、海を隔てて慶良間島、渡名喜島、慶伊島が浮き並んで、波の上をはってゆくような姿は眠っている龍になぞらえることができる。沖を遙かに見渡すと、その果でもない海は、見たことのない中国の方角とのことである。北には遠くに読谷山、近くに泊、那覇の津に出入りする舟が絶え間なく、追い風を十分に受けた帆を張って行き交う様子は、八景にもたとえるべきものである。磯辺に近い漁民と小舟は、暮らしをたてるための仕事だろうか、波のうねりに見え隠れする様子は、有名な絵師であっても筆を捨てるほどのものであろう。仰げば風情ある山の形、見下ろせば水際の真砂、数えがたいものであるが、多くの景色が心に感じられて、骨にしみて、書こうにも筆は走りかねて、どんなこともわからず、良し悪しのことはさしおいた。

あらゆるものに姿が映らないということはない（四方すべてに見るべきものがある）。見ることに果てもない鏡洲の庵である（鏡洲の

庵からはいろいろな景色が見える。)

〔注釈〕

- 1 御同人 この文章の前に収録されている和文の作者。すなわち島津矢柄。二十五話参照。
- 2 国の守 国司。また、江戸時代の国持大名。ここでは、薩摩藩主であり、薩摩守を名乗っていた島津重年。
- 3 仰ごとありて此国に渡り 島津矢柄は宝暦二年（一七五二）二月から同四年（一七五四）三月まで琉球在番奉行の任にあった。
- 4 そのふ 園生。園生の鶯の声を詠んだ歌として「はなさかぬやどのそのふのくれたけにはるをしらするうぐひすのこゑ」（『教長集』春歌・五六）がある。
- 5 おもふどち 気の合った仲間。
- 6 小禄 小禄村。もとは真和志間切に属していたが、一六七三年に小禄間切が新設されるとその中心をなす村となり、番所が設置された。一七九三年の居民は八二〇余人。
- 7 賤夫 身分の低い男。
- 8 我故郷 文章の作者である島津矢柄の故郷。鹿児島か。
- 9 苗代 粳種をまき、稲の苗を育てる水田。
- 10 八重の潮路 非常に長い海路。
- 11 打曇り 空がさつと雲に覆われて。
- 12 笠やどり 笠宿。軒下や木陰に雨宿りをする。
- 13 ますみの鏡洲 ますみ（真澄）は澄んでいて明るいこと。ますみの鏡は曇りなく澄みきっている鏡の意。鏡洲は、小禄の地名。鏡地^{かがち}。
- 14 虎伏野 虎が棲んでいる野。人があまり訪れない辺境。
- 15 栗国雅丈 雅丈は男子を敬っている語。島津矢柄の滞琉中の「栗国雅丈」に該当する人物は不明。
- 16 別墅 別荘。「墅」は小さい家。
- 17 藪の中にも咲く梅のゝ事ぞなき 藪の中に咲く梅は、花の姿はそれほど見えないが、花の香りは隠れることがない。凡河内躬恒の「春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるる」（『古今和歌集』春歌上・四一）を踏まえている。
- 18 わざとならぬ 「わざとならず」の「ず」を見せ消ちで「ぬ」と直

している。19 みぎり 砌。①軒下などの雨滴を受けるために石を敷いたところ。②水辺。ここでは②の意か。20 あだに 阿檀^{あだん}。タコノキ科の木。21 七人の賢き人たち 竹林の七賢。中国晋代に、竹林に集った七人の隠者。阮籍、嵇康、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎。22 四方を「を」傍記。23 当間 小禄間切の村。同間切が成立する以前は豊見城間切に属した。赤嶺村・安次嶺村の西に位置する。沖繩戦後、米軍に接収されて村落は消滅し、現在は自衛隊基地として使用されている。24 赤嶺 小禄間切の中央に位置する村。同間切成立以前は豊見城間切のうち。安次嶺村の南東にあり、一九〇三年に同村に合併した。25 安次嶺 小禄間切の中央に位置する。同間切成立以前は豊見城間切に属していた。近代には野菜生産と養蚕業が盛んであった。26 岡のはへ「はへ」は「はえ（映え）」か。岡のはなやかな見た目。27 山眉 山の端のほのかな様子を眉墨に、美しい眉を山の稜線に見立てた語。28 青柳の糸満 「青柳の糸」は、青柳のしだれた枝を糸に見立てた語。また、「青柳の」は「糸」にかかる枕詞である。糸満は糸満村。現在の糸満市のうち。『琉球国由来記』に兼城間切の村として見える。古くから漁業を営んでいたことと知られる。29 目路 目に見える限り。視界。30 洲長 瀬長島。那覇空港に近く、現在の豊見城市のうち。『中山伝信録』に「砂嶽」とあり、徐葆光はこの地を漢詩に詠んだ（『琉球国志略』。「瀬長山」は組踊「手水の縁」の舞台とも言われ、琉歌にも詠われている。31 大嶺 当間村の西、小禄間切の西端に位置する。小禄間切設置以前は豊見城間切。慶良間諸島を望む海辺の低地に位置し、大嶺村の漁師は竜舟の漕手や難破船の救出などで活躍した。冊封副使として来琉した徐葆光に大嶺を詠んだ漢詩がある（『琉球国志略』）。戦前に海軍飛行場建設のために接収され、戦後は米軍基地となった。現在には那覇空港となっている。32 慶良間島 慶良間諸島。近世期には馬齒山とも呼ばれ

た。33 となき 渡名喜島。上・第十話の伊是名筑登之親雲上の文章に「馬齒山、栗国、渡名喜の島々」とある。34 けい島 慶伊島。那覇港の近くに位置。35 匍匐 地に手を伏してはつて行くこと。36 有蘇海 荒磯^{ありそうみ}海か。荒磯海は、岩石が露出し、荒波の打ち寄せる海辺。あるいは、富山湾西部の古称で歌枕の有磯^{ありそうみ}海か。直前の「はてもなく」の「なく」と「有」が対照となっている。37 読谷山 読谷。沖繩島中部の西側に位置。38 泊り 泊港。古琉球期には沖繩島の周辺の島々の船が入り出して賑わった。近世期には、琉球に漂着した中国人・朝鮮人を泊港に回漕した。39 真帆 帆走する船の、十分に追い風を受けて張った帆。40 八つ景 八景。ある地域で特に優れた八カ所の名所。ちなみに宝暦六年（一七五六）に琉球を訪れた冊封使の周煌は『琉球国志略』で「泉崎夜月」「臨海潮声」「久米村竹籬」「龍洞松濤」「筍崖夕照」「長虹秋霽」「城嶽靈泉」「中島蕉園」を球陽八景として挙げている。41 世渡る くらしをたてる。42 うね 畝。小高く連なった地形や波のうねりを言う。43 絵師 「縛」に「絵」が傍記。44 かしき 「をかしき」か。45 よしあしの柄 「柄」は筆の軸。「よしあし」は、この直前に「なにはのこと」とあることから、「なにわのよしあし」（いいか悪いかの意）という言葉を踏まえているのだろう。

（屋良健一郎）

二十七

〈本文〉

惣慶¹

朝ひる公の御本にて、四節香²の興業侍に、まづ初花いとめづらしきをもてあそび、あしひきの山時鳥⁴、おのが五月の雨の夜にふり出てなく

声を心のうらに聞はやし、俊成⁶のなみだなそへそと詠じ給ひけん草の庵のむかしまで思ひよせられ、又、秋風の尾上^{おのの}より、影ものすくくさし出る有明の月もおかしきを、峯のしら雪ふりつみて、梢残らず花咲を、さながら見渡す心地して、弥^よあかず、興あればたゞにやはとて、仙人のあそびとやいはん四のときたゞ目の前のけふのむしろはこと書をみて、

めづらしな花時鳥月雪もけふのむしろの外ならずして

〈口語訳〉

朝、昼一日中、貴人のお宅で、四季ごとの聞香の催しがありましたところ、まず（春の香では）初花の香り（梅の香）がたいへんすばらしいのを楽しみ、（夏の香では）山時鳥が自分にふさわしい五月の雨の夜に出てきて鳴く声を心の内で褒めそやして、俊成が涙を流してはいけなさと詠じた庵の昔まで思い合わせ、（秋の香では）秋風の吹く山裾の上から月の光が甚だしくさす有明の月も趣き深いものと思われ、（冬の香では）嶺に降った白雪が降り積もって、梢が残らず花が咲いたようになっているのを、眼前に見渡す気持ちになり、いよいよ堪能して、風情があるのでそのまま何もしいではいられようかといつて歌を詠んだ。

仙人の遊びといおうか。香によって四つの季節がそのまま目の前の今日の宴に現れるよ。

別の文を見て詠んだ。

すばらしいことだ。梅の花や山時鳥、月や雪までも今日の宴では特別な間柄である。

〈注釈〉

- 1 惣慶 上・六話の注2参照。 2 四節香の興業 四季ごとの聞

香の催し。ただし、琉球で香が親しまれたかは確認されない。 3 初花 その年、その季節に咲く最初の花。ここでは梅の花をいうか。春の香として「梅花香」が炊かれたか。 4 あしひきの 「あしひき」は山などを導く枕詞。 5 山時鳥くふり出てなく声 「限りなきなみだと見えて時鳥おのが五月の雨に鳴くなり」（蓮生法師『秋風抄』下・雑歌・二七二）。「おのが五月」は、「山時鳥」が鳴くにふさわしい季節である陰暦五月という意か。有名な歌に「ほととぎす鳴くや五月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな」（古今和歌集・四六九）がある。

6 俊成のく草の庵 「昔思ふ草の庵の夜の雨になみだなそへそ山郭公」（俊成『六華和歌集』第二・夏歌・三六〇）。時鳥香が炊かれたか。

7 秋風の尾上よりく有明の月もおかしきを 和歌が背景にあると思われる。「四季香」の解説には、「陶淵明の四時の詩に、古歌を取合して趣向を立てた」とあり、春は「春水」、夏は「夏雲」、秋は「秋月」、冬は「冬嶺」を称えるという（杉本文太郎『香道』雄山閣、一九六九年）。春と夏については、「四季香」の解説と一致する「古歌」が背景にあるとは考えられないが、秋と冬は「四季香」の解説が記す「趣向」と合うような「古歌」が背景にあるか。 8 たゞにやはとて 反語表現で、そのままにもしいでいられようかの意。 9 むしろ 集まりの場所。宴。 10 外ならずして 無関係ではない特別な間柄。

（島村幸一）

二十八

〈本文〉

1 日新寺殿在家菩薩御詠歌

いにしへの道を聞てもとなへても我^{わが}おこなひにせずばかひなし
ろうのうへもはにふの小屋もすむ人の心にこそは高きいやしき

はかなくも明日のいのちをたのむかなけふもくまなびをばせで
 4 いたるこそ「友」としよけれまじはらで我にます人おとなしきひと
 5 とけ神他にましまさず人よりも心にはぢよ天地能く知る

へたぞとて我とゆるすな稽古だにつもらばはりも山とことのは
 6 とがありて人をきるとも軽^(かろ)すないかすかたなはたゞひとつ「なり」

10 ちゑのうは身につけぬれど荷にならず人はおもんじはづるもの也
 11 利も法もたゝぬ世ぞとてひきやすき心の駒の行にまかすな

12 ぬすびとはよそから入^(い)とおもふな耳目の門にとざし能せよ
 13 ぬすつと貴人や君がものがたりはじめてきける顔持ぞよき

14 小車の我悪業にひかれてやつとむる道をうしとみるらん
 15 私^(わたくし)をすて、君にしむかはねば恨もおこり述懐もあり

16 学文はあしたのしほのひるまにも波のよるこそ猶しづか也
 17 よきあしき人のうへにも身をみがけ友は鏡となるものぞかし

18 たねとなる心の水にまかせずば道よりほかになまながれまじ
 19 れいするは人にするかは人をまたさぐるは人をさぐるものかは

20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

31 まんのうも一ゑんとありつかふるに身ばしたのむな思案堪忍
 32 賢不肖もちひすつるといふ人もかならず「なら」ば殊勝なるべし
 33 不勢^(ふせい)とて敵をあなどる事なかれ多勢をみても恐るべからず

34 こゝろこそいくさする身のいのちなれ揃ゆればいき揃はねば死す
 35 廻向には我とひとゝをへだつなよ看経^(かんきやう)はよししてもしづとも

36 てきと成人こそは我師匠^(わがし)ぞとおもひかへして身をばたしなめ
 37 あきらけきめもくれ竹の此世より迷もいかに後のやみちは

38 さけも水ながれもさけと成ぞかしたゝなさけあれ君がことの
 39 きく事もまた見ることも心がらみな迷ひ也みな悟なり

40 ゆみをえてうしなふことも大将の心ひとつの手をばはなれず
 41 めぐりては我身にこそはつかへけれ先祖のまつり忠孝の道

42 みちにたゞ身をばすてんとおもひとれかならず天の助けあるべし
 43 舌^(し)たゞにも齒のこはきをばしるものを人は心のなからましやは

44 多^(おほ)るよをさましもやらで益に無明^(むみやう)のさけをかさぬるはうし
 45 ひとり身をあはれとおもへものごとくに民にはゆるす心なるべし

46 もろくの国や所の政道は人にまづよくおしへならはせ
 47 善にうつりあやまれるをば改めよ義不義は生れつかぬもの也

48 すくしきをたれりもしれみちぬれば月もほどなく十六夜の空
 49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

自分より優れた思慮深い人がよい。

仏や神は（心の中におり）他所にいらつしやらない。だから他人よりも自分の心に対して恥ずかしく思へ。（他人が見ていなくても、あなたの行動は）天地がよく知っているのだから。

へただからといって自らを許してはいけない。稽古さえ積みめば、塵も山となるという大和言葉があるのだから。

過失があつてその人を斬るとしても、（自分の一存で）軽率に行つてはならない。生かす刀も（殺すも刀も）ただ一つ、主君がもつものだ。

智慧や芸能は身に付けたとしても荷物にはならない。人はそれらを重んじたり自らと比べて恥じたりするものである。

道理や法が働かない世だからといって、影響を受けやすい心の馬を、思い通りに行かせてはいけない。

盗人は外側より入ってくると思つていいのか。自身の内側への門に当る耳や目に、錠をよくかけておけ。

よく知つている話であつても、高貴な人や主君の物語は、初めて聞いたおももちでいるのがよい。

小車の車輪のように因果がめぐつて、前世に行つた自身の悪業に引かれたのだろうか。どうして励んでいる道をつらいと思つてしまふのだろうか。

私情を捨てて主君に接しなければ、主君を恨んだり不満を述べたりしてしまふものだ。

学問をするなら、朝の潮が引く昼間よりも、波が寄せる夜の方がいっそ静かでない。

善悪の人の身の上を見て我が身を磨け。友は自らを正す手本となるものだ。

煩惱の種となる心の水に身を任せなければ、道を外れて汚名も広ま

らないだろう。

礼を尽くすのは相手のためにしているのだろうか。また、人を見下すのはその人を見下しているのだろうか（どちらも自分に返ってくるのだから、自身に行つていけると同じことだ）。

相手を非難するにも二通りあるだろう。（それらの非難は）総じて主人のためになるものと知れ。

つらいからといって恨みを返してはいけない。自分が他人に、他人が自分に仕返ししては、際限なく報復し合う世の中になってしまう。

願ひごとをしなければ、（人々を）分け隔てたりしないだろう。偽りの世の中に真実のある伊勢の神は。

その名を今の世にとどめた昔の人も同じ人であり、心も同じ心なのだから、今の人がどうして劣つてゐることがあるう。

楽しいことも苦しいことも、時が過ぎれば跡に残らない。世の中に残る名前を、ひたすらに思うべきである。

昔から、道理に外れておこる者は、天の責めにあわないことがない。つらい現世の身の上は、前世の報いだと思うと、今の行いは来世の境遇となるだろう。

亥の刻（十時）に寝て寅の刻（四時）に起きるのは、夕方におきた露のようにはかない身を、むだにさせないためである。

（死を）のがれられそうにない場合をあらかじめ覚悟せよ。そうすれば、その時に至つてもいさぎよくできる。

思いがけず（道を）違えてしまふものだ。だから、自身の欲を捨てて義を守れ、人よ。

たとえ辛くてもまっすぐな道を行け。曲がりくねった坂道を進んだ果ては、鞍馬の坂のように暗く、道を外れた生涯が待つただけだ。

穏やかなことと怒ることは、言わば弓（武）と筆（文）であつて、

鳥に二つのつばさがあるのと同じく一対のものだと知れ。

あらゆる芸能に通じていても一つの真心がなければ役に立たないというが、主君に仕えるのに身体などあてにするな。思案や我慢が大切である。

賢い人を登用し愚かな人を放逐するという人も、(口だけでなく)必ず行うならば感心なことだ。

兵が少ないからといって敵を侮ることがあつてはならない。また多勢を見ても恐れるべきではない。

心こそが合戦をする身にとって最も重要である。心が揃えば生き、揃わなければ死ぬ。

廻向では味方と敵を区別してはいけない。読経はしてもしなくてもよい。

敵となる人こそ、却って自分の師匠であると思い直し、身をつつしめ。

曇りなき目もくらんで、この世にいるうちから迷っていたならば、死後に向かう闇路ではどうなるだろう。

(越王勾踐の故事のように、主君の言葉次第で)酒も水に、川の流れも酒となるのだ。ひたすらに思いやれ、主君の言葉を。

聞くことも、また見ることも心の持ち用しだいで、すべてが迷いのもとであり、悟りのもととなる。

弓を得て、それを失うこともあるが、大将の心がけひとつで弓矢を手離さずにいることができる。

(いずれは自分に返ってくるので)巡っては自分自身に奉仕していたのだ。先祖を祭ることや、忠義や孝行の道というのは。

もつぱら、正しい道のために命を捨てようと決心せよ。そうすれば、必ず天の助けがあるだろう。

舌でさえも歯が硬いことを知っているのに、人は(身近な人を理解

する)心がなくてよいだろうか、いやそんなことはない。

酔っているような俗世の迷いを酔い覚ましもしないで、盃に迷いの酒を重ねるのはうらめしいことだ。

寄る辺のない身の上の者を憐れと思いなさい。何事につけても、民に対しては寛容な心であるべきだ。

様々な国や土地の法度は、民にまず第一に教え習わせよ。善いことを行うようにし、誤っていれば改めよ。義や不義は生まれ

つきのものではないのだ。

少ない状態で十分であることを知れ。満ち足りてしまえば満月もすぐに欠け、十六夜の月が空に昇るのだ。

〈注釈〉

1 日新寺殿在家菩薩御詠歌「日新寺殿在家菩薩」は、島津忠良(一四九二―一五六八年)のこと。忠良の子の貴久は島津本家に養子に入り、十五代の当主となった。「日新寺」は、永禄七年(一五六四)に島津忠良が再興した菩提寺。開基は島津国久だが、忠良の死後に七世住持の梅安が寺号を日新寺に改めた。明治二年(一八六九)に廃仏毀釈によって廃寺となるも、同六年(一八七三)に、有志二十五人が忠良を祭神とした竹田神社を造営した(『地名大系(鹿児島)』)。「在家菩薩」は、忠良の法名の梅岳常潤在家菩薩による。この「御詠歌」は、「日新公いろは歌」の名で知られる。忠良は、天文十四年(一五四五)にいろは歌を作成すると家老の春成久正に託し、京都の連歌師の宗養に批評を頼んだ。宗養は、そのいろは歌を近衛家十五代当主の近衛植家に見せている。尚古集成館本の「日新様伊呂波御歌」には、宗養の批語と植家の奥書がある。「近衛植家書状」(『島津家文書之二』一一二六番)には、植家がいろは歌を読み、奥書を書き付けたことが書かれている。この書状には年号が書かれていないが、天文十五年(一五四

六」と推定されている。「日新公いろは歌」の伝本は、尚古集成館の江戸期写本の他にも多数ある。門田邦義は『島津日新公いろは歌解説』所収の「いろは歌写本に対する検討」の中で、宮原家所蔵本、竹田神社所蔵の『日新菩薩記』所収の本文、春成家所蔵本、天保十四年（一八四三）に郷土年寄五氏によって集録された「再撰帳」をあげている。中でも宮原家所蔵本は、日新が第三子尚久に贈ったものを、後に宮原家が拝領したものとされ、「原拠たるべき」とする。この他、一首のみだが、日新の自筆とされる「ゑ」の歌を加世田の鮫島家が秘蔵するという。門田氏があげるもの以外では、寛永十二年（一六三五）の「島津家久覚書」（『島津家文書之四』一五六五）中に、「日新様之伊呂波哥」が八首（い・に・よ・そ・お・ひ・せ・すの歌）、「島津家久筆日新公いろは歌」（『島津家文書之四』一五八七）が六首（い・り・た・れ・ね・まの歌）見られる。このいろは歌は、薩摩だけでなく琉球でも読まれたとされる。屋良健一郎は、『思出草』により、識名盛命が薩摩役人から送られたいろは歌を座右にかけていた例を指摘している（『近世琉球の日本文化受容』）。『浮縄雅文集』の本文は誤りが多い。以下の注では、宮原家本と尚古集成館本の異同を示し、口語訳は宮原家本の本文に従う。また、『浮縄雅文集』の本文に宗養の批語は見られないが、解釈上参考する場合は、春成家所蔵本か尚古集成館本の批語を引く（両本の批語は異なる場合がある）。 2 はにふの小屋 「はに」は赤土。赤土を塗っただけの小さな家。あばら家。 3 けふもくとまなびをばせで 春成家本の宗養の批語に「今日不学して来日ありと云事なかれ、此詞に相叶候」とある。朱熹の「朱文公勸学文」の、「勿謂今日不学而来日（謂ふこと勿かれ、今日学ばずとも、而も来日有り、と）」（『古文真宝前集』卷之二）による。 4 にたるこそ「友」としよけれ 「友」脱字。宮原家本・尚古本にて補う。似た者同士の方が友としやすい。「似るを友とす」は諺か。「似るを友とかやの風情

に」（『平家物語』卷一「鱸」）、「相順フ兵モ、皆似ルヲ友トスル事ナレバ」（『太平記』卷二十二「畑六郎左衛門事」）などの例がある。 5 まじはらで 宮原家本・尚古館本「ましはらは」。「で」では意味が通らないので、「まじはらば」で解す。 6 はり 宮原家本・尚古館本「ちり」。「はり」は「ちり」の誤写か。 7 山とことのは 塵も山となるの「山と」、大和言葉の「大和」がかかる。宮原家本は「やまとことのは」、「尚古館本は、「やまとことのは」。「山と」とするものに「再撰帳」などがある（いろは歌写本に対する検討）。 8 いかすかたなは 「かたなは」の「は」は、宮原家本・尚古館本「も」。「殺人刀、活人剣」をふまえ、主君が生殺の権限を持っていることを言う（『島津日新公いろは歌解説』）。「殺人刀、活人剣」は、禪宗で、師が修行者を指導する活殺自在のやり方を刀剣に喩えた語で、真の指導者は活殺に偏らないとされる（『例文 仏教語大辞典』）。禪宗の語録に「殺人須是殺人刀。活人須是活人剣」（『円悟仏果禅师語録』卷十四）などの例がある他、幸若舞『満仲』にも「殺人刀活人剣、みな一念の内也」の例が見られる。 9 ひとつ「なり」 宮原家本・尚古館本「ひとつなり」。「なり」脱字。 10 ちまのう 「知恵能」で、知恵と芸能の意（『島津日新公いろは歌解説』）。 11 つけ 尚古館本「付」。 12 利 宮原家本・尚古館本「理」。「法」との組み合わせなので、「理」が適切。 13 ひきやすい心の駒の行にまかすな 煩惱を引き寄せやすい心を馬に喩えている。「ひき」は「駒」の縁語。『島津日新公いろは歌解説』は、「心の駒」を仏教語の「意馬心猿」によるとする。『和訓栞』に「ひかれなハあしき道にも入ぬベし心のこまにたづなゆらすな」の例がある。心の引くにまかせる、という発想の歌に、「おろかなる心のひくにまかせてもさてさはいかにつひの思ひは」（『新古今和歌集』一七四九・雑歌下・西行）がある。 14 から 宮原家本・尚古館本「より」。 15 なよ 宮原家本・尚古館本「かや」。 16 るつう 流通。「るず

う」とも。よく知っていること。流布。 17 顔持 顔つき。おももち。 18 小車の我 「小車の輪」が掛かる。「小車」は、小さな車。牛車。「因果の小車」のように、因果の循環は車輪の回転にたとえられるため、「悪業」の縁語としても使われるか。小車・輪・ひかれ・道・牛は縁語（『島津日新公いろは歌解説』）。 19 也 宮原家本・尚古館本「なれ」。 20 にも 宮原家本・尚古館本「にて」。 21 たねとなるゝなかれまし この行全体が補入。 22 心の水 清濁や深淺などの心の状態を水にたとえた語。ここでは、低い方向に流れる水の性質を煩惱に引かれやすい心と結びつける。「心の水」を詠んだ和歌に、「そこきよく、心の水をすまさずはいかがさとの蓮をもみん」（『新古今和歌集』一九四七・釈教歌・藤原兼実）などがある。 23 そしるにもふたつあるべし 二つの誇りとは、単なる悪口と諷めるための批判を言うか。ただし、尚古館本の批語には「衆惡之必察焉衆好之必察焉」（衆これを惡むも必ず察す。衆これを好むも必ず察す）とある。『論語』（衛靈公十五・四〇六）を引いたもので、好惡の世評をそのまま信用せずに真相を観察するの意。批語から解釈すると、「ふたつ」は好惡の世評となるが、「そしる」を悪口や非難の意に解した場合、意味が合わない。 24 へだてもあらじく伊勢の神垣 「神垣」は神域とその他を隔てるものだが、「伊勢の神垣」とは言っても、伊勢の神は人々を分け隔てることがない、という意。伊勢の神に隔てがないというのは、謡曲『野宮』に「伊勢の神垣隔てなく、法の教への道直に」などの例がある。 25 露の 宮原家本「露も」。主要な本文の中でも「も」とするのは、宮原家本のみとされる（「いろは歌写本に対する検討」）。 26 義を守る 宮原家本「儀を守れ」、尚古館本「義を守れ」。「守る」の場合、義を守る人でも思いがけず道を違えてしまう、の意となってしまうため、歌意が異なる。「儀」は、『日新菩薩記』や春成家所蔵本も同じ（「いろは歌写本に対する検討」）。 27 行き 宮原家本「ゆけ」、

尚古館本「行け」。 28 黒葛れの末ゑはくらまの 「黒葛れ」は、宮原家本「つゝらおり」、尚古館本「九折」。他に「九折」「九折坂」「九曲折」などの表記が見られるとする（「いろは歌写本に対する検討」）。つづらおりは、曲がりくねって続く坂道のこと。「黒葛」はつづらと読むので、本文は「黒葛折れ」とあるべきところか。「くらま」は鞍馬山。鞍馬山の古名は「暗部山」で、鞍馬山も「暗し」が掛けられる。例に「昔よりくらまの山といひけるはわがごと人もよるやこえけん」（『後撰和歌集』一一四一・雑二・亭子院の今あこ）がある。また、鞍馬山の道を「つづらおり」と共に詠んだ歌に、「程ちかく見えて遠きはくらま山九折なるいはのかけ道」（『基綱集』一七七）がある。姉小路基綱（一四四二〜一五〇四年）の作。 29 さかさまの世 『大鏡』（地「右大臣師輔」）に「いみじからむさかさまの罪ありとも」の例がある。「さかさまの罪」は皇族などに対する反逆・殺人などの罪。「さかさまの世」は、道に背いた一生の意か。 30 いかり 宮原家本・尚古館本「いかる」。 31 まんのうも一しゑ 宮原家本・尚古館本「万能も一心」。「ゑ」は誤写か。万能一心。あらゆる芸能に通じていても、一つの真心がなければ役に立たないこと。 32 かならず「なら」ば 宮原家本・尚古館本「かならずならは」。「なら」脱字。 33 不勢 宮原家本・尚古館本「無勢」（ぶぜい）。「いろは歌写本に対する検討」に、宮原家本や『日新菩薩記』、春成家所蔵本などの他は、「不勢」とする本文が多いとある。 34 廻向 自分の行った善根を自分や他の人の悟りのために差し向けること。 35 看経 読経。経を黙読することを言う場合もある。 36 しず 宮原家本「せず」、尚古館本「せず」。 37 身をば 宮原家本・尚古館本「身をも」。 38 きらミセケチで右に「きら」と傍記。訂正前の文字も「きら」と読める。 39 迷も 宮原家本・尚古館本「まよは、」。 40 さけも水ながれもさけと成ぞかし 尚古館本の宗養の批語に「一筆醜不能味一河水と云

り、ことに情ふかく興を催し候」とある。『三略』上に「夫一簣醪、不能味一河之水（それ一簣の醪は、一河の水に味するあたわず）」とあるが、これはある「良将」の逸話の一文。良将はもらった酒を川に注ぎ、その川の水を兵卒と共に飲んだ。酒の味はしなかったが、その思いを感じとった兵卒は、将のために死ぬことをいとわなくなったという。

同様の話の中には、「良将」を越王勾践とするものがある（『列女伝』卷一「楚子発母」など）。本歌はこの故事を踏まえる。41 心がら「心から」とも読めるが、『島津日新公いろは歌解説』は「心がら」とする。心柄。心の持ち用。42 ゆみをえてく心ひとつの手をばはなれず「ひとつ」の「つ」は補入。『島津日新公いろは歌解説』は、「ゆみ」に「弓矢の道」の意が含まれるとし、弓を得ることを軍勢の心を得ることに解している。尚古館本の宗養の批語は「得弓与矢弓豈離楚王手」（弓と矢とを得ば、弓、豈に楚王の手を離れんや）とある。批語は、『孔子家語』（好生）などの以下の話を踏まえるか。楚の恭王は、遊びに出た際に烏号という弓を亡くしたが、楚人が得るのだからと探させなかった。孔子はこの話を聞き、弓を得る者を楚人に限定したことを批判した。この歌自体が楚王の故事を踏まえているか、はつきりしないが、弓の得失に関しては文字通りに解しておく。43 ゑゝる「酔ふ」の連体形「酔へる」とあるべきところが、宮原家本や『日新菩薩記』なども「ゑゝる」とする（「いろは歌写本に対する検討」）。44 無明のさけ 無明は根本的な無知で、すべての苦をもたらす原因。無明を正常な心を失わせる酒にたとえた語。45 なる 宮原家本・尚古館本「ある」。「な」は誤写か。46 すくし 宮原家本・尚古館本「すこし」。47 なく 宮原家本・尚古館本「なき」。

（小此木敏明）

二十九

〈本文〉

諏訪李右衛門¹

ある人、山庄²に來りてかたらふほど日暮る。とゞめて灯の本に陳雷⁴のまじはりをとるつゝぬにいふ。中山雲上⁵の御坪⁶いほひかにして、文王の園⁷ともいはまほし。其景のあらましをのべん。松原⁹とこしなへに茂り、ほとりに山形をきづかせ、山はふじのねいつとてか鹿の子まだらに雪の降らんといひし日の本のながめをなし、香炉峯¹¹の雪は簾をまかせて見るとながめしものこしの心にかよひ給ふ。さるは暖国にて、雪てふ物を写絵¹³ならでは見給はねば、芳野¹³と聞ては花を忍び、さらしなと聞ては月をおもひ、梅と聞てはすえに生ずる例を引給ふ御心掟な¹⁵「る」べし。扱、東は八重の塩路¹⁶に浮べる津堅島¹⁷、久高島¹⁷まの前にして、高き屋に登りて見れば煙たつとながめ給ひし寛仁大度¹⁹のむかしに覚え、漕行舟²⁰の跡のしら波には、世の常なき事をしのび給はん御心はへなるべし。南はやいす嶽²¹高くそひて、幾重²²ともなき山のたち、巨勢金岡²⁶が毫もいかでかくみ尽さん。暁は、峯²⁵にわかる、横雲の為に玉の簾²⁷を釣²⁸「る」のばせ、御心齋²⁹てまつり事を取給ひ、夕は帰る鴉のおくれ先立行をひとつふたつ三つ四つなどかぞへ給ふほど、薄墨の空に消て見えずなれば、けふの日も命のうちにどうぞうちめかれ、夢の世を觀じ給ふ種なるべし。西は那覇³⁰の入海、かの帯にせる小澗川といひけんやうに流れて、「る」の山のた、ずまひ、大和にいはゞまだふみも見ぬ天の橋だて、もうこしにおもへば西施³³にたぐへし西湖³⁴とやいはん。雨もよし、晴もよき詠を常にし、世塵³⁵を出、吟骨³⁶を涼しめ給ふくさはひ成べし。北は浦副山³⁸につゞきて、弁の嶽雲³⁹高く、天童⁴⁰の羽衣⁴¹をかけ給ふ高ねなれば、笠の端をならべまうぬる袖の行かひ暇なく、

霧不断の香を焼き、日常住の灯をか、げ、世にたうとき霊地也。山高くして、かげ、御階⁴³におほふがごとく見ゆれば、とはに御前にいまそがる御こ、ちして、辱⁴⁴さになみだこぼれし円位上人の丹誠にも覚え給ひなかし。そのみならず、元来、茶を嗜⁴⁵給ふ御心にて、営せける茶室のありさま、いへばさらなり。黒木のはしらは青丹吉⁴⁶ならの山なるとの給ひしすべらきの御心にかよひ、茅ふける軒は榮啓期⁴⁷が螺屋になぞらへ、柴の神がき、薄の箔、竹のあみ戸、〔一〕ならぬに籠居させ給ひて、趙州三⁴⁸潔の禪をあまなひ、遠波車軸の音に眠をさまし、松風を煮て底なき桶に水ながらほど、いふ道歌の旨をさぐり給ふなどいひつゝくるま、に、泪をさしぐみ、こゝろあまりて詞たらず見えければ、肝に入てい〔一〕ほどに、夜いたく更ぬ。寶⁵²をすかして、あなたのおましに臥させ、独丸⁵³寝の床に宵ゐの物語りをしのべば、感慨襟に溢てもねられず。おきあがりて灯の本に硯をならし、みじかき葦の柄を揮ひ、色香しられん後の人の為にとせし程に、夢の根ながき冬の夜も、⁵⁴ほがらなくと明果ぬれば、まらふどもつとにおきてかへる申す。袖をひかへてみせしに、めでくつがへりて帰りしが、又の日、一軸を袖にしきたりて清書を求む。幾回か、いなびしかども、責の重ければ力なく、老の禿筆⁵⁷して、はへなきこと草をかけば、手さへわな、かれて、冬地をわかぬ盲蛇⁵⁸の罪さりどころなくこそおほえしか。

延宝⁵⁹九神無月上漸日、鐙川⁶⁰の山庄にて、一夢⁶¹叟製書畢

〈口語訳〉

諏訪左右衛門（諏訪兼利）

ある人が山荘に来て語らううちに日が暮れた。帰ろうとするのをとめて、明かりの下で陳重と雷義のような親しい交わりをする中で次のような話をした。「中山王の庭園は美しく、文王の園と言いたくなるほどである。その景色のあらましを述べよう。松原はいつまでも茂り、

その近くには築山を築かせており、〈富士山は今をいつだと思つて鹿子斑のように雪が降っているのだろうか〉とも詠まれた日本の眺めを成していて、〈香炉峯の雪は簾を巻かせて見る〉と眺めた中国の心に通じなさっている。もともと琉球は暖かい国で、雪というものを写絵以外でご覧になることはないのです、吉野と聞いては桜を思い、更級と聞いては月を思い、梅と聞いては末に生じる例をお引きになる御心の持ちようなのだろう。さて、東は遠くの海に浮かぶ津堅島・久高島を目の前にして、〈高い建物に登つて周りを見ると、（人々の家から）食事を作る煙が立っている〉とご覧になった慈悲深く心の広い昔のことが思われて、漕ぎ行く舟の跡の白波には〈世の中を何に譬えん〉の歌のように世の無常をしのびなさる御心の持ちようであろう。南には八重瀬岳が高くそびえ、幾重ともない山の形は巨勢金岡の筆もどうして巧みに描くことができようか。晩には、峯に分かれる横雲を見るために美しい簾を釣り上げ、御心も晴れて政治をなさり、夕には帰る鴉の遅れたり先だつて行く様子を一つ、二つ、三つ、四つなど数えなさるうちに、薄墨色の空に消えて見えなくなれば、〈今日の日も命のうちに〉とため息をおつきになり、夢のようにはかない世をご覧になるものとなるでしょう。西は那覇の入江、あの帯にする小澗川といったように流れて、〔一〕の山（奥武山か）のたたずまいは大和で言えば〈まだふみも見ぬ天の橋だて〉に相当し、中国で考えたと西施と並べなれた西湖と言えるであろう。雨の日も良く、晴れの日も良い眺めが常にあり、世のわずらわしさを逃れ、詩歌を作る精神を磨ききつかけとなるだろう。北は浦添山に続き、弁ヶ嶽が雲高く、天童の羽衣をかけなさる高嶺なので、笠の端を並べ、参詣する袖の行き交うことが絶えることなく、霧は絶えることなく香を焚いているかのように立ち込め、日は常夜灯を掲げるように照っている、世に尊い霊地である。山が高く、その影が殿舎の階段を覆うかのように見えるので、永久に御前にいらつ

しやる御心地して、恐縮の余りに涙をこぼした西行の真心ともお思いになるのだらう。そのみならず、もともと茶を嗜みなさる御心で、整えなされた茶室の様子は言うまでもない。黒木の柱は〈あおによし奈良の山なる〉とお詠みになられた聖武天皇の御心に通じ、茅ぶきの軒は榮啓期の鰯屋になぞらえるもので、柴の垣、薄の箔、竹の網戸、〔一〕ではないところに閉じこもりなさって、趙州從諗の三潔の禪をよしとし、遠い波や車軸の音に目を覚まし、松風を煮て、底のない桶に水が流れていると言う道歌の旨をさぐりなさる〕など言い続けるうちに涙ぐみ、心が余って言葉が足りない様子に見えたので、肝に〔一〕するうちに夜がとて更けた。客をなぐさめて、あちらの寢床に寝かせ、一人で着物を着たまま横になっている床で宵の物語をしのんでいると、感慨が襟に溢れて寝ることができない。起き上がった明かりの下で硯を用意し、短い筆を揮い、色香を知るのであるう後世の人のためにと書いていたところ、夢の根が長い冬の夜も明けてしまったので、客も早くに起きて帰るといふ。袖をとって引きとめて文章を見せたところ、大いに感嘆して帰ったが、翌日、一軸を袖に入れて来て、清書を求めた。何回か断ったが、強く求めるので力及ばず、老人の衰えた筆で映えることない言葉を書く、手も震えて、冬に地を知らない盲蛇の罪は言い逃れの余地がないと思うのである。

延宝九年（一六八一）十月上旬、鐙川の山庄にて、一夢叟が記した。

〈注釈〉

1 諏訪奎右衛門 諏訪兼利。十六話の注6参照。 2 ある人 諏訪兼利のもとを訪ねた「ある人」は、琉球国王の庭園のことを話しており、薩摩に滞在していた琉球人、あるいは琉球を訪れたことがある薩摩人のいずれかであろう。ちなみに、この文章が書かれた延宝九年

（康熙二十、一六八一）十月に薩摩にいた琉球人として、『中山世譜』附巻より以下の人が知られる。真壁親方賢宣（年頭使として康熙十九年六月九日に薩摩着、康熙二十年十月十三日に帰国）、伊舎堂親方守淨（年頭使として康熙二十年六月十二日に薩摩着、同年十月十二日に帰国）、上間親方安時（徳川家綱死去の慰問のため、康熙二十年七月に薩摩着、同年十二月十五日に帰国）、名護王子朝元および恩納親方安治（徳川綱吉への代替を慶賀するため、康熙二十年六月二十三日に薩摩着、翌二十一年八月二十二日に朝元病死、十月十日に安治帰国）。このうち、真壁賢宣は山本春正らの編による『正木のかづら』に和歌二首が収録されている。山本春正に琉球人の和歌を送ったのは諏訪兼利と思われるため、真壁と諏訪の間に交流があったことが想定される。諏訪のもとを訪れた「ある人」は真壁賢宣の可能性が高いか。 3 山庄『薩藩名勝考』に「郡元中村」（郡元村およびその北に位置する中村のことであろう。現鹿児島市）の説明として、「寛文十二年の比、前

の宗とる司びと諏訪兼利、五十九歳にて仕を致し、一の艸舎を設ひ隠れ居し所なり」とある。兼利は前年の寛文十一年（一六七二）には病により家老を致仕しており、のち延宝七年（一六七九）には家督を弟の兼時に譲っている（津田修造「薩摩の歌人『諏訪兼利』について」）。二十九話の文章が書かれた延宝九年（一六八一）には、兼利は藩の職を辞し、家督も譲り「山庄」に隠居していたわけである。 4 陳雷のまじはり「雷陳膠漆」とも言う。深く固い友情のこと。後漢の時代、陳重と雷義の友情は膠や漆がくっつくよりも固いと言われたことによる。『後漢書』『雷義伝』に「膠漆自謂堅、不如雷与陳」（膠漆は自ずから堅くなると謂うも、雷と陳とに如かず）とある。 5 中山雲上「雲上」は高貴な人々のいる場所を指す。琉球国王である中山王のこと。この文章が書かれた延宝九年（一六八一）は尚貞の治世（在位一六六九―一七〇九年）。 6 御坪 御壺。御所などの中庭のこと。

ここでは琉球国王の別邸である東苑（御茶屋御殿）を指すか。東苑は尚貞が一六七七年に築造。尚敬の時代には、この地で茶道や生花など様々な芸能が披露された。上・三話／五話参照。 7 いほひか 不明。照屋論文は「においやか」（美しい様子）などの意味ではないかとする。

8 文王の園 文王は紀元前十二世紀頃に周を創建した王。古代の理想的な聖人君主とされる。「文王の園」とは、禽獸を放し飼いにしていた園（れいゆう）であろう。平安京造営の際に大内裏の南に築かれた神泉苑が園を手本としたとされるなど（『太平記』巻第十二）、理想的な園とみなされた。 9 とこしなへ 「し」は補入。 10 山はふじ

のね／＼降るらん 「時知らぬ山は富士のねいつとてかかのこまだらに雪のふるらん」（『伊勢物語』九段）の歌を引いている。「かのこまだら」

（鹿子斑）は鹿の毛色の白い斑紋。 11 香炉峯の雪は 白居易の詩「香炉峯下新卜山居草堂初成偶題東壁」（香炉峯下、新たに山居を卜し、

草堂初めて成り、偶東壁に題す）の中の「香炉峰雪撥簾看」（香炉峰の雪は簾を撥（か）けて看る）という句を踏まえている。 12 雪てふ物を

見給はねば 薩摩の琉球侵攻の様子を伝える『喜安日記』は、慶長十五年（一六一〇）正月十三日に鹿児島で積雪があった際のことを「球

陽には雪と云事名をのみ聞て終に見給はねば、皆興を催し歌読詩作りてぞ慰ける」と記す。 13 芳野 吉野。奈良県の吉野山。桜の名所として有名。「こえぬまはよしの山のさくら花人づてにのみきさわた

るかな」（『古今和歌集』恋歌・紀貫之）などの歌がある。 14 さら

しな 更級。長野県北部の地名。月の名所。「わが心なくさめかねつさ

らしなやをばすて山にてる月を見て」（『古今和歌集』雑歌・よみ人し

らず）などの歌がある。 15 心掟 心の持ち方。ものの考え方。 16

津堅島 うるま市に属する島。東苑の東北東の方角に位置する。 17

久高島 南城市に属する島。津堅島の南南西約九キロの地点にあり、

東苑からは東南東の方角に位置する。『中山世鑑』によれば、琉球の開

闢神である阿摩美久（アマミキウ）は天から五穀の種子を持ち下り、麦・粟・黍などを久高島に初めて蒔いたという。琉球王国の重要な聖地であり、康熙十二年（一六七三）までは国王による行幸も行われていた。 18 高

き屋に／＼ながめ給ひし「煙たつと」の「と」は補入。「たかき屋にの

ぼりてみれば煙たつたみのかまどはにぎはひにけり」（『新古今和歌集』

賀歌・仁徳天皇）の歌を踏まえている。 19 寛仁大度のむかし 「寛

仁」は寛大で慈悲深いこと。「大度」は心の広いこと。優れた君主が治

めていた時代。 20 漕行舟の／＼しのび給はん 「世の中をなににたと

へむあさばらけこぎゆく舟のあとのしら浪」（『拾遺和歌集』巻第二十・

哀傷・沙弥満誓）を踏まえているのだらう。「漕行舟の跡のしら波」

は、船の跡の白波が消えてしまうように、世の中が変わりやすいこと

を嘆く表現。 21 やいす嶽 八重瀬岳。八重瀬岳は八重瀬町にある

石灰岩台地。標高一六三メートル。中腹には八重洲グスクが存在する。

『球陽』によると、尚貞二十一年（二六八九）、八重瀬岳の近くの富盛

村がしばしば火災にあっており、風水を見させたところ、八重瀬岳に

向けて獅子を作るとよいとの判断が出て、獅子（富盛の石彫大獅子）

を建てたという。 22 そひて 正しくは「そびえて」か。 23 た

ち 「ち」は「り」を見せ消ちしている。正しくは「かたち」か。

24 巨勢金岡 九世紀後半の絵師。八六八年頃に「神泉苑図」を書い

た。 25 峯にわかる、横雲 「春の夜の夢のうき橋とだえて峯にわ

かるよこぐもの空」（『新古今和歌集』春・藤原定家）から引いてい

るのである（照屋論文）。 26 玉の簾 美しい簾。玉で飾った簾。

27 タは／＼かぞへ給ふ 『枕草子』の「秋は夕暮れ。夕日のさして山の

端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三

つなど、飛びいそぐさへあはれなり。」（一 春はあけぼの）を踏まえ

ている。 28 けふの日も命のうちに 延宝三年（一六七五）刊の地

誌『蘆分船』に「夕陽西に傾けばけふもはや命のうちに暮にけりあす

もやきかん入逢の鐘にをの（目をさまし」とある（『続々群書類従』第八・地理部）。 29 うちうめかれ「うちうめく」（打呻）はため息をつく、の意。 30 かの帯にせる小澗川「帯にせる」は川が帯のように流れていることを指す。「おほきみのみかさのやまのおびにせるほそたにがはのおとのさやけさ」（『万葉集』巻第七）、「まがねふくきびの中山おびにせるほそたに河のおとのさやけさ」（『古今和歌集』巻第二十）などがあり、細谷川（流れの細い谷川の意）が詠まれる。小澗川は不明だが、あるいは細谷川と同義か。 31 「」の山 字の欠損で確定できないが、前後の文脈からすると奥武山のことか。奥武山は、現在は陸続きになっているが、かつて国場川下流に浮かぶ小島であった。松が生い茂る風光明媚な地であったため、しばしば詩歌に詠まれた。 32 まだふみも見ぬ天の橋だて「大江山生野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」（『袋草紙』小式部内侍）を踏まえている。 33 西施 春秋時代の越の女性。越王から呉王に送られ、呉王が西施の美しさに溺れている隙に越が呉を滅ぼしたという。 34 西湖 浙江省杭州市の西側にある湖。三方を丘陵に囲まれた景勝地。西湖を詠んだ蘇軾（一〇三六―一一〇一年）の詩に「欲把西湖比西子」（西湖を把つて西子に比せんと欲すれば）とあるなど、西施に喩えられることがあった（棟方徳「詩文にみる西湖の変遷」）。 35 世塵 世のわずらわしい事。 36 吟骨 詩歌を作る精神。 37 くさはひ 種わい。物事の原因。 38 浦副山 浦添山であらう。浦添山の名は『中山伝信録』巻四に見える。浦添山は浦添城跡のある丘陵を指すか。 39 弁の嶽 弁ヶ嶽。首里にある丘陵で標高一六五・七メートル。御嶽でもあり、国王の祈願所。 40 天童 鬼神や天人が童子の姿で現われたもの。 41 まうぬる 詣でるという意味であらう。正しくは「まうづる」などうか。 42 霧不断の香を焼き、日常住の灯をかゝげ 仏前で絶やさずに香を焚くように、霧が絶えず立ちこめること。常に変わらず輝く

灯のように、太陽が照っていること。『平家物語』灌頂巻・大原御幸に「薨やぶれては霧不断の香をたき、柩おちては月常住の灯をかかく」とある。 43 御階 殿舎の階段。特に紫宸殿の階段。 44 円位 西行のこと。 45 茶を嗜給ふ御心 茶を飲む文化は古琉球期から確認されるが、島津氏の侵攻後に士族の間でより盛んになったようである。寛文七年（一六六七）に摂政の羽地朝秀（向象賢）らが出した布達には、士族が嗜むべき芸能が列挙されているが、そこに茶道も入っている。また、延宝元年（一六七三）に尚貞が諏訪木右衛門（兼利）に宛てた書状によると、尚貞は諏訪兼利を通じて茶道書や茶人を入手していたようである（喜舎場一隆「琉球における茶道」。また、康熙十五年（一六七六）には湛水親方賢忠が「御茶道之首長」に任じられるなど、尚貞の治世で茶道が盛んだった様子が窺える。 46 青丹吉くすべらき 「あをによしならのやまなるくもちつくれるむろはませどあかぬかも」（『万葉集』巻八）を踏まえている。この歌の作者は聖武天皇。 47 栄啓期が鰐屋 栄啓期は春秋時代の人。粗末な身なりで楽しそうにしている栄啓期を見た孔子が、なにが楽しいのかを尋ねたところ、人間に生まれたこと、男に生まれたこと、長生きしていることを挙げたという。「鰐屋」は不詳。粗末な家の意か。 48 趙州 趙州從諗（七七八―八九七年）か。唐宋の禅僧。 49 三潔 正しくは三喫。趙州が新旧三人の参禅者に茶をすすめた故事（照屋論文）。 50 あまなひ 和なう。よしとする。 51 こゝろあまりて詞たらず『古今和歌集』仮名序に「在原業平はその心余りて言葉たらず。しばめる花の色なくて、にほひ残れるがごとし。」とあることを踏まえているのだろう。 52 實をすかして 「賓」は客のこと。「すかす」（賺す）は、なぐさめること。 53 丸寝 着物を着たままで寝ること。 54 ほがらぐ 夜が次第に明けてゆくさま。 55 袖をひかへて 袖をとらえて引きとめて。 56 めでくつがえりて 非常に感嘆して。 57

禿筆 使いふるされた筆。自分の文章を謙遜して言う語。 58 盲蛇
 「盲蛇物におじず」の略で、物の恐ろしさを知らない者が向こうみず
 なことを言うことを言う。また、ここでは字の下手な様子をへりくだっ
 て言っているのであらう。 59 延宝九神無月上漸日 延宝九年（一
 六八一）は九月二十九日に改元している。「上漸」は正しくは「上漸
 で上旬の意。 60 鑑川 不明。この和文の作者が諏訪兼利だとす
 ると、鹿児島市を流れる田上川か。兼利が山庄を構えた郡元（あるいは
 中村）は田上川の東側に位置する。 61 一夢叟 『称名墓志』による
 と、諏訪兼利は「荒田翁又老蜚子夢現叟庵拂子」と称したという（『新
 薩藩叢書』三）。

（屋良健一郎）

〈引用資料〉

- 『蘆分船』（続々群書類従）第八・地理部。
 『阿毘達磨俱舍論』『円悟仏果禅師語録』『妙法蓮華経』、『SAT』大正新脩大
 藏經テキストデータベース（<http://21dsk.u-tokyo.ac.jp/SAT/>）。
 『石垣家文書』、石垣市史編集委員会編『石垣市史 八重山史料集一』（石垣
 市、一九九五年）。
 『遺老説伝』、嘉手納宗徳編訳『沖縄文化史料集成6 球陽外巻遺老説伝』
 （角川書店、一九七八年）。
 『永代門弟帳』、守屋毅「資料紹介 池坊永代門弟帳―その一」（『芸能史研
 究』六十三、一九七八年）。
 『思出草』、池宮正治「毛起竜（識名盛命）『思出草』―翻刻と注釈」（『日
 本東洋文化論集』八、二〇〇二年三月）。
 『大島筆記』、『日本庶民生活史料集成』第一巻（三）書房、一九六八年）。
 『沖縄語辞典』国立国語研究所編（大蔵省印刷局、一九七五年）。
 『海東諸国紀』申叔舟（岩波書店、一九九一年）。
 『夏子陽 使琉球録』原田禹雄訳注（榕樹書林、二〇〇一年）。
 『喜安日記（沖縄学研究資料六）』池宮正治解説（榕樹書林、二〇〇〇）。
 『近世沖縄和歌集 本文と研究』池宮正治他（ひるぎ社、一九九〇年）。

- 『沖縄文化史料集成5 球陽 原文編・読み下し編』球陽研究会編（角川書
 店、一九七四年）。
 『金石文』沖縄県教育庁文化課編（沖縄県教育委員会、一九八五年）。
 『元史 第十三冊（明）』宋濂撰（中華書局、一九七六年）。
 『後漢書（第六冊列伝四）』吉川忠夫訳注（岩波書店、二〇〇三年）。
 『古文真宝前集上（新釈漢文大系9）』星川清孝（明治書院、一九六七年）。
 『混効験集の研究』池宮正治（第一書房、一九九五年）。
 『三養雜記』、日本随筆大成編輯部『日本随筆大成（第二期）六』（吉川弘文
 館、一九七四年）。
 『三略』、村山孚訳注『中国の思想 十』（徳間書店、一九六五年）。
 『書言字考節用集研究並びに索引（改訂新版）』中田祝夫・小林祥次郎（勉
 誠出版、二〇〇六年）。
 『貞丈雜記』島田勇雄校注（平凡社、一九八五年）。
 『称名墓志』、『新薩藩叢書』（歴史図書社、一九七一年）。
 『書経 上（新釈漢文大系25）』加藤常賢（明治書院、一九八三年）。
 『新統題林和歌集』、上野洋三編『近世和歌撰集集成 堂上篇下』（明治書
 院、一九八八年）。
 『中山伝信録（新訳注版）』原田禹雄訳注（榕樹書林、一九九九年）。
 『中山要案総論』（沖縄県立図書館東恩納文庫）。
 『中山世譜』、『中山世鑑』、伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書
 四・五』（鳳文書館、一九八八年復刻）。
 『白隠禅師法語全集 第一冊』芳澤勝弘訳注（禅文化研究所、一九九九年）。
 『白氏文集 三』岡村繁（明治書院、一九八八年）。
 『番外謡曲（浦島）』、日本名著全集刊行会編『謡曲三百五十番集』（日本名著全
 集刊行会、一九二八年）。
 『藩法集8 鹿兒島藩』（創文社、一九六九年）。
 『文翰雜編（二）』（臨川書店、一九八〇年）。
 『平敷屋朝敏作品集』仲原裕翻刻・訳（仲原裕、一九九四年）。
 『麻氏兄弟たち』渡口真清（自家版、一九七〇年）。
 『正木のかつら』吉田幸一編『長嘯子全集 四』古典文庫、一九七三年）。
 『宮古島旧記並史歌集解』稲村賢敷（至言社、一九七七年）。
 『孟子（新釈漢文大系 四）』内野熊一郎（明治書院、一九六二年）。
 『楽訓』貝原益軒著（柳枝軒英城信清、宝永八年（一七一）跋、小此木

自架蔵本。

『定本琉球国由来記』外間守善・波照間永吉（角川書店、一九九七）。

『琉球国由来記』伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書』第一、二卷（鳳文書館、一九九〇年復刻）。

『琉球使者の江戸上り』宮城栄昌（第一書房、一九八二年）。

『琉球神道記』横山重編（角川書店、一九七〇年）。

『歴代宝案 訳注本第3冊』沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編（沖縄県教育委員会、一九九八年）。

『論語（新釈漢文大系1）』吉田賢抗（明治書院、二〇〇四年改訂）。

『倭訓栞（増補語林）』井上頼国・小杉樞郎増補（皇典講究所、一八九八年）。家譜資料

那覇市企画部市史編集室編『那覇市史 資料篇』巻五（八）（那覇市企画部市史編集室、一九七六～一九八三年）。

那覇市歴史博物館編『氏集 首里・那覇 増補改訂版』（那覇市市民文化歴史博物館、二〇〇八年）。

日本古典文学大系

『沙石集』『曾我物語』『太平記』。

新日本古典文学大系

謡曲『天鼓』（謡曲百番）所収、幸若舞『満仲』（舞の本）所収。

新編日本古典文学全集

『伊勢物語』『源氏物語』『将門記』『曾我物語』『平家物語』『枕草子』、謡曲『江口』『俊寛』『野宮』『花筐』『熊野』『楊貴妃』『山姥』（謡曲集）所収。

『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2（角川書店、二〇〇三年）

『河海抄』『古今和歌集』『後撰和歌集』『佐保川』『拾遺和歌集』『新古今和歌集』『新明題和歌集』『続千載和歌集』『為広集I』『教長集』『袋草紙』『碧玉集』『基綱集』。

〈参考文献〉

池宮正治『近世沖縄の肖像—文学者・芸能者列伝 上下』（ひるぎ社、一九八二年）。

同「組踊に関する資料三件」、『琉球芸能総論（池宮正治著作選集2）』（笠間

書院、二〇一五年）。

同「和文学の流れ」、『琉球史文化論（池宮正治著作選集3）』（笠間書院、二〇一五年）。

池宮正治・崎原綾乃「南方熊楠宛末吉安恭の書簡」、横山茂雄『南方熊楠に学ぶ南方熊楠の学際的研究プロジェクト報告書』（奈良女子大学人間文化研究科、二〇〇四年）。

石井修道「中国の五山十刹制度の基礎的研究（四）」（駒澤大学仏教学部論集）一六、一九八五年）。

石田瑞麿編『例文仏教語大辞典』（小学館、一九九七年）。

上野洋三「細江草」、日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典』五（岩波書店、一九八四年）。

岡本弘道「近世琉球における茶文化の重層性」、西村昌也編『東アジアの茶飲文化と茶業』（関西大学文化交渉学教育研究拠点、二〇一一年）。

沖縄県姓氏家系大辞典纂委員会編『沖縄県姓氏家系大辞典』（角川書店、一九九二年）。

『沖縄古語大辞典』編集委員会編『沖縄古語大辞典』（角川書店、二〇〇六年）。

外務省編『近代陰陽暦対照表』（原書房、一九七一年）。

門田邦義『島津日新公いろは歌解説』（金海堂書店、一九三八年）。

漢語大詞典編輯委員会編『漢語大詞典』七・十二（漢語大詞典出版社、一九九一・一九九三年）。

喜舎場一隆「琉球における茶道」（九州文化史研究所紀要）三十五、一九九〇年）。

久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）。

黒田安雄「藩政改革と対外的危機—汾陽文書の紹介—」（愛知学院大学人間文化研究所紀要）二、一九八六年）。

神坂次郎『南方熊楠の宇宙』（四季社、二〇〇五年）。

杉村文太郎『香道』（雄山閣出版、一九六九年）。

尚古集成館編『日新公いろは歌』（尚古集成館、一九九二年）。

田名真之「東苑（御茶屋御殿） 中山第一の勝境 冊封使の接待に使う」（『国際おきなわ』十九、一九八七年）。

田中道雄・橋口晋作・福井迪子『松操和歌集本文と研究』（鹿児島県立短期大学地域研究所、一九八〇年）。

津田修造「山本春正年譜稿（下）」（『甲南紀要』二十三、一九九八年）。

津田修造「薩摩の歌人『諏訪兼利』について」（『国語鹿兒島』四十六、二〇〇九年）。

東京大学史料編纂所『大日本古文書 家わけ十六 島津家文書之四』（東京大学史料編纂所、二〇一一年）。

渡名喜明「沖縄文化史の一断面」、山本弘文先生還暦記念論集刊行委員会編『琉球の歴史と文化 山本弘文博士還暦記念論集』（本邦書籍、一九八五年）。

徳永和喜「薩摩藩対外交渉史の研究」（九州大学出版会、二〇〇五年）。

那覇市文化局歴史資料室編『那覇市制七十五周年 詩歌集 那覇を詠う』（那覇市、一九九七年）。

原田禹雄訳注『中山傳信録（新訳注版）』（榕樹書林、一九九九年）。

東恩納寛惇『南島風土記』、『東恩納寛惇全集 七』（第一書房、一九八〇年）。

同『六諭衍儀伝』、『東恩納寛惇全集 八』（第一書房、一九八〇年）。

松崎仁「天神伝説と演劇」（『日本文学研究』二九、一九九三年）。

宮島壯英「唐船（進貢船・接貢船）に関する覚書―全乗船者の構成を中心に」（『歴代宝案研究』六・七、一九九六年三月）。

棟方徳「詩文にみる西湖の変遷」（『岐阜聖徳学園大学国語国文学』十八、一九九九年）。

屋代熊太郎編『島津日新公伊呂波歌略解（訂正再版）』（吉田書房、一九二二年）。

屋部憲次郎『伊姓安富祖家譜訳注』（屋部憲次郎、一九九二年）。

屋良健一郎「琉球人と和歌」（『東京大学日本史学研究室紀要別冊（中世政治社会論叢）』二〇一二年）。

同「近世琉球の日本文化受容」、清水光明編『近代化』論と日本―東アジアの捉え方をめぐって（勉誠出版、二〇一五年）。

吉田道興「道元禪師伝記史料集成（一）」（『愛知学院大学教養部紀要』五三一、二〇〇五年）。

『浮縄雅文集』解題

『浮縄雅文集』は二十九編の和文（擬古文）を収録した文集で、近世琉球における士族たちの和文学の受容を考える上で貴重な資料である。書名にある「浮縄」は「沖縄」と同じ意味で、「沖」の方言「ウチ」を「浮」と表記したものである^①。

『琉球文学』資料注釈4『浮縄雅文集』上^②（立正大学人文科学研究所年報 第五十五号所収）において前半部、今回の『琉球文学』資料注釈4『浮縄雅文集』下^③で後半部について、翻刻・口語訳・注釈を施した。その際、二十九編の和文に「一から二十九の番号をふった。以下、この解題において、『浮縄雅文集』所収の和文に言及する際には「二」や「二十九」のようにその番号で示すこととする（後掲の「表」参照）。

『浮縄雅文集』は、池宮正治が琉球の和文作者について研究するなかで一部が紹介されてきたが^④、全体像が示されたのは照屋亜季奈^⑤『浮縄雅文集』翻刻と注釈^⑥（二〇〇四年度琉球大学法文学部卒業論文）が初めてである。照屋は全文を翻刻し、注釈を施すと共に、構成についての考察も行っており、貴重な研究成果である^⑦。まずは、照屋論文によって明らかにされている主な点を左に示す。

（1）『浮縄雅文集』は沖縄県立図書館東恩納寛惇文庫に所蔵されている。縦二十五センチ、横十八センチ、毛筆書き。和装の一冊で、罫紙が三十四丁、これに厚めの紙で表紙・裏表紙が付けられている。一丁表にはタイトル「浮縄雅文集」と「蕉雨亭」という文字が記されている。「蕉雨亭」とは護得久朝常（一八五〇年～一九一〇年）のことである^⑧。

（2）『浮縄雅文集』には二十九編の和文（擬古文）が収録されており、その中に和歌百二十一首を含む。文字数は四百字詰原稿用紙で五十四枚程である。二十九編のうち、作品名が付されているものが十一編、作者名が付されているものが二十二編ある。琉球人だけではなく大和人の作品も含まれている。それら二十九編の作品は、十七世紀後半から十九世紀前半にかけて記されたものと思われる。

（3）もともと『浮縄雅文集』として存在していたものを護得久朝常が筆写したのか、個々の和文を護得久が筆写して『浮縄雅文集』としてまとめたのか不明である。

（4）収録されている和文は、日本・中国の古典文学からの引用が多く、和文学・漢文学に対する琉球人の教養を知ることができる。

（5）二十九編の和文を内容で見ると、「叙景」「国王賛美」「饞」「哀悼」などに分類できる。最も多いのは「哀悼」で九編、すなわち全体の三分の一を占める。

以上のような照屋論文の成果を踏まえた上で、『浮縄雅文集』に対する若干の考察を加えてみたい。まずは本書の伝来について見てみよう。沖縄県立図書館東恩納寛惇文庫には、他にも蕉雨亭（護得久朝常）の筆写した『思出草』『混効験集』『球陽』『遺老説伝』が所蔵されている。『球陽』の第一冊目の巻末には「球陽八冊遺老説伝一冊、合九冊、護得久朝常大人家蔵ナリシヲ家大人寛裕請受ケテ送り給シモノナリ、護得久大人ノ自筆二係リ」云々という東恩納寛惇による書き入れがある。寛裕は寛惇の父である。つまり、『球陽』と『遺老説伝』は護得久朝常が筆写して東恩納寛裕へと送り、それが息子寛惇へと伝わって、のちに県立図書館に所蔵されるようになったということになる。『浮縄雅文集』も朝常から寛裕あるいは寛惇へ送られたものが、後に図書館

に入ったのであろう。寛惇は明治四十二年（一九〇九）刊行の『大日本地名辞書』続編で琉球の項を執筆しているが、そこで『浮縄雅文集』所収の数編の和文を引用している。⁵この頃までには寛惇は『浮縄雅文集』を入手していたと考えられる。

ところで、照屋論文で指摘されているように、『浮縄雅文集』の成立に関しては全くの不明という他ない。もともと近世期に『浮縄雅文集』という書が成立していて護得久朝常がそれを書写したのか、あるいは、朝常自身が近世期の和文を集めて『浮縄雅文集』としてまとめた可能性もある。それを明らかにできないのが残念だが、収録された和文に関するいくつかの注目を指摘しておきたい。

『浮縄雅文集』所収の和文は、本文一行目の右肩に人名が小書きされているものが多い。和文によっては、人名・本文の前に作品名が付されているものもある。この人名はこれまで漠然と作者名と考えられてきたものの、特に根拠が示されていたわけではない。しかし、以下のことから、やはり作者名と考えてよからう。「十七」は「糸満里之子いた」⁶「ることば」という作品名がついており、本文冒頭の右肩に「惣慶」と小書きされている。和歌や音楽に優れた少年、糸満里之子の死を悼む文章である。文の後ろには「宝永八年七月」の年記が付されている。この糸満里之子への追悼文は、南方熊楠に宛てた大正七年（一九一八）六月四日付の末吉安恭書簡において、末吉が全文を紹介している。⁷字句の異同の状況から、『浮縄雅文集』の「十七」は末吉が紹介したものと別系統のものと思われるが、両者を見比べると興味深いことが分かる。末吉が紹介したものは本文の後に「宝永八年七月 惣慶忠義」とあり、日下（年記の下）に和文の作者である惣慶忠義の名が記されている。これが糸満里之子への追悼文の本来の形であり、『浮縄雅文集』の編者が同書に収録する際に、日下の署名を削ったのであろう。「十七」以外の和文についても同様の処理がなされたと思われる。

る。すなわち、本文冒頭の右肩に記されている人名は、『浮縄雅文集』のもととなった和文に付されていた作者名と考えられるのである。⁸

『浮縄雅文集』収録作品の情報についてまとめたのが後掲の表である。作者名が「親方」や「親雲上」などの称号で記されており、実名がないため不確実な部分も少なくないが、収録された作品のうち、他と性格が異なる「二十八」を除くと、最も古いものが「二十九」の一六八一年、最も新しいものは、「九」の作者「大工廻親雲上」が太工廻安詳（一七九一年～一八五一年）とした場合は十九世紀前半、安詳ではない場合は「一」の一七六二年頃ということになる。依然として不明な点が多いが、十八世紀前半から半ば頃にかけて、琉球で多くの和文が記されていたことは読み取れる。十八世紀は和歌・和文に代表される和文学が隆盛した時期と言えるのではないか。¹⁰

さて、「三」と「四」はどちらも国王家の別邸の御茶屋御殿（東苑）に関わる文章である。「三」が本文の前に「於御茶屋諸芸づくしの時」という題をもつのに対して、「四」の本文の前には「同時」と記されている。「四」の文章の後には「于時寛保初の年小春旬余三日」と年記があるので、「三」と「四」は同じ寛保元年（一七四一）の出来事を記していることが分かる。『浮縄雅文集』の和文の半数以上は本文の前に何も記されていないことからすると、「四」の「同時」は『浮縄雅文集』の編纂者や筆写者によって記されたのではなく、「三」と「四」の和文を収録していた原資料の形を残していると考えてもよいのではないか。すなわち、ある雅文集が先行して存在し、そこに並んで記されていた二つの和文が『浮縄雅文集』に「三」と「四」として収録されたのではないだろうか。ちなみに、「五」の「御茶屋の景」も御茶屋御殿に関わるもの（ただし、年代は享保六年で「三」「四」とは異なる）であることからすると、あるいは「五」も「三」「四」と同じ資料を出典とするかもしれない。また、「八」から「十二」は、いずれも本文の前に作

品名がなく、本文の後に「月日」とのみ記されている点が共通している。「八」から「十二」までの和文も、ある一つの雅文集から収録されたのではないだろうか。¹¹ 以上のように、『浮縄雅文集』所収の和文のいくつかは、先行する何らかの文集から抄出した可能性を考えてもいいように思う。

最後に、近世琉球には多くの和文が存在していたと思われるが、『浮縄雅文集』所収の和文はどのような基準で選ばれたのであろうか。先述のように、同書の和文には作者名が付されていても、実名が記されていないので、和文の内容や記された時期から作者名を推測するほかない。そのため作者の比定が確実とは限らないが、概ね正しいとすると、以下のようなことが見えてくる。

日高次左衛門（為一）による「十八」は、惣慶忠義の作である「十七」を受けて記されたものと考えられる（十八話の注釈10）。惣慶が自身の記した文章「十七」を薩摩藩の日高に送り、それに付された跋文が「十八」の文ではないか。すなわち、琉球の官人の和文の指導者としての日高為一の存在が浮かび上がる。日高は豊川親方正英に書札礼を伝授した人物でもある（上・三話の注釈2）。その豊川正英の手になると思われる和文も四編入っている。そうすると、「三」「六」「七」「八」「十一」「十三」「十七」「十八」「二十三」「二十七」の十編は日高とその指導を受けた琉球の官人の作として括えることができそうである。

また、「二十九」は薩摩の諏訪左右衛門（兼利）による和文である。諏訪兼利は平敷慶隆と和歌を通じた交流があった。¹² その平敷の十三回忌に弟子によって記されたと見られる「十六」の作者が石嶺真忍と思われることから、平敷と石嶺は子弟関係にあったと見ていいだろう。また、やはり平敷の十三回忌に関わる文章らしき「二十一」所収の和歌の作者として屋良親雲上が見え、これが屋良宜易だとすると、平敷と屋良も浅からぬ関係にあったことになる。そうすると「十二」「十

四」「十五」「十六」「十九」「二十一」「二十九」の七編は平敷慶隆の周辺の人物に関わる作品ということになろう。

つまり、『浮縄雅文集』所収の和文は、作者で大きく分けると、日高・豊川・惣慶に関わる作品、諏訪・屋良・石嶺に関わる作品、その他となろう。日高や諏訪といった薩摩藩士の作品が収録されたのは、たまたまではなく、彼らが琉球の和文作者に大きな影響を与えた存在であったからだろう。付言するならば、「二十五」「二十六」の作者の島津矢柄は在番奉行として琉球の人々から評価が高かったようだし（二十五）の注釈1）、また、「二十八」の島津忠良の伊呂波歌が収録されている点も『浮縄雅文集』における薩摩の存在感を強めている。そのことは、琉球における和歌・和文が薩摩との交流や薩摩藩士の指導のもとで磨かれていったことの表れでもあろう。

『浮縄雅文集』にはいまだ不明な点が多いが、近世琉球の士族たちの文化活動や琉薩の交流を考える上で貴重な史料である。今後、『浮縄雅文集』の分析が進むことで、琉球の和歌・和文や文化史の研究が深まることが期待される。

（屋良健一郎）

注

- （1）『東恩納寛惇全集6』（第一書房、一九七九年）八五頁。「浮縄」表記は琉歌では見られるが、和歌・和文に関わるものでの使用は珍しい。和歌や和文では沖縄を指す語として「うるま」がよく用いられる。
- （2）池宮は『近世沖縄の肖像 文学者・芸能者列伝』上・下（ひるぎ社、一九八二年）、「和文学の流れ」（『新琉球史 近世編（下）』琉球新報社、一九九〇年）、「那覇市制七十五周年詩歌集 那覇を詠う」那覇市、一九九七年）などで『浮縄雅文集』を紹介している。また、嘉手刈千鶴子が『おもしろ琉歌の世界』（森話社、二〇〇三年）の中で同書に言及している。

(3) 同論文の閲覧と本稿での紹介を快諾いただいた照屋亜季奈氏、および閲覧にあたって協力いただいた前城淳子氏に感謝申し上げる。照屋論文では他にも『浮縄雅文集』所収「雨夜物語」と『大島筆記』所収「雨夜物語」の比較や、『大島筆記』所収「琉球人和歌」に関する言及など、重要な指摘がいくつもある。なお、拙稿「近世琉球の日本文化受容」

(清水光明編『近世化』論と日本、勉誠出版、二〇一五年)でも『浮縄雅文集』について言及したが、その時点では照屋論文を未見であったため、その成果を反映することはできなかったことを記しておく。

(4) 池宮正治「毛起竜(識名盛命)『思出草』翻刻と注釈」『日本東洋文化論集』八、二〇〇二年。

(5) 寛惇は「二」の全文(『東恩納寛惇全集』一五〇頁)と「三」の一部(一二五頁)、「二六」の一部(一九九頁)を引用している。「三」の引用にあたって「浮縄雅文集に云ふ」とあり、『浮縄雅文集』から引用したことが分かる。

(6) 十九世紀半ばには、水戸藩が『続扶桑洲葉集』編纂に着手し、同藩の依頼を受けた薩摩藩は、琉球に対して、琉球で作られた和歌・和文の提出を命じている(『琉球王国評定所文書 第一〇巻』一三〇頁)。「浮縄雅文集」が近世期に成立したものだとなると、あるいはこのような動きと関係あるのかもしれない。また、琉球の和文の流布については小此木敏明「『大島筆記』所収の琉球和文について」『雨夜物語』における『源氏物語』『伊勢物語』の享受と『永峯和文』の流布(『立正大学人文科学研究所年報』第五十三号、二〇一六年)が参考になる。

(7) 池宮正治・崎原綾乃「南方熊楠宛 末吉安恭の書簡」『南方熊楠の学際的研究プロジェクト報告書』二〇〇四年、一六二頁。

(8) 崎原綾乃「末吉安恭の書簡 解題」『南方熊楠の学際的研究プロジェクト報告書』、一二六頁。なお、末吉の書簡で紹介されている和文には「糸満里之子をいためることば」という題がなく、この題がもともと付けられていたものか、『浮縄雅文集』編纂の際に新たに付けられたものか不明である。

(9) なぜ作者名を本文冒頭の右肩に記すスタイルにしたのかは不明である。あるいは、『浮縄雅文集』の編者が護得久朝常ではないと考えた場合、『浮縄雅文集』には本来はこの作者名は記されておらず、書写した護得久朝常がもとなった和文から作者名を追記した可能性もあるか。

(10) 注(3) 拙稿。

(11) このように本文の後に「月日」とのみ記入がある史料としては、書札の稽古に使用された文例集が思い浮ぶ(『那覇市史資料篇』第一卷十一所収「書簡・案文関係資料」)。「八」から「十二」が先行して成立していた文集を出典としていたとすると、それは和文の稽古のためのテキストのようなものだったのだろうか。

(12) 「十六」の和文、および拙稿「琉球人と和歌」(『東京大学日本史学研究室紀要別冊 中世政治社会論叢』二〇一三年)。

〔表〕『浮縄雅文集』所収の作品

	作品名・説明書	作 者 名	年 記	内 容 ・ 備 考
一	雨夜物語	〔久志親雲上〕	〔一七六二年以前〕	金氏の恋物語
二	那覇の入江の名所づくし	玉城親方〔朝薫か〕		那覇の風景を描写
三	於御茶屋諸芸づくしの時	豊川親方〔正英か〕	〔一七四一年〕	寛保元年の東苑での諸芸披露について
四	同時	山内親方〔盛方か〕	寛保初の年小春旬余三日（一七四一年）	〔三〕と同じく、東苑での諸芸披露を記す
五	御茶屋の景		享保六年丑臘月日（一七二二年）	御茶屋御殿についての描写
六	盆山記	惣慶〔忠義か〕		盆山の魅力について
七	水無月の末つかた……	豊川親方〔正英か〕	寛保二歳季夏日（一七四二年）	風景を楽しむことについて
八	〔よつの海〕	添石親雲上〔豊川正英か〕	月日〔一七二三年か〕	弓術について
九	〔いにしへの賢き人〕	大工廻親雲上〔安詳か〕	月日	金先生について
十	〔一吉〕	伊是名筑登之親雲上〔長良か〕	月日	家から見える風景の描写
十一	〔翰墨の春〕	添石親雲上〔豊川正英か〕	月日	書について
十二	〔爰に西氏公〕	石嶺親雲上〔真忍か〕	月日	西氏公のこと
十三	武蔵の国荏原郡にて……	源為一〔日高為一か〕	月日〔一七一〇年〕	日高為一が武蔵国で屋富祖某へ送った文
十四	〔実にや人の〕	屋良親雲上〔宣易か〕	享保八年癸卯七月十三日（一七二三年）	子の死去を悼む文
十五	〔飛花落葉の〕		大清雍正五年乙未六月廿三日（一七二七年）	麻氏（石嶺）真忍の死を悼む文

十六	【慶隆のぬしは】	〔石嶺真忍〕	〔二七二七年か〕	平敷慶隆の十三回忌にあたって記された文
十七	糸満里之子いた〔るこ〕とは	惣慶〔忠義〕	宝永八年七月（二七二一年）	糸満里之子への追悼文
十八	【糸満さとのし】	日高次左衛門〔為一〕	〔二七二二年〕	糸満里之子への追悼文（十七の跋か）
十九	毛氏具志川親方盛昌卒去之時吊	屋良親雲上〔宣易〕	享保七年寅正月十七日（二七二二年）	具志川盛昌への追悼文
二十	【爰にわがをほきみ】	伊是名筑登之親雲上〔長良か〕	〔二七五一年以降〕	尚敬王の死去を悼む文
二十一	【曹氏のきみ】		〔二七一七年か〕	平敷慶隆の十三回忌にあたって記された文か
二十二	【春のけしき】			小祿氏の子の墓を見た時のこと
二十三	盆石の記	日高次左衛門〔為一か〕		盆石について
二十四	【梁氏外間親雲上は】	美里里之子親雲上		外間親雲上の盆石の詩について
二十五	【さりぬる宝暦二の年】	島津矢柄	〔二七五四年〕	薩摩への帰国に際しての琉球の人々との別れ
二十六	【去年の春】	御同人〔島津矢柄〕	〔二七五三年〕	小祿の風景
二十七	【朝ひる公の御本にて】	惣慶〔忠義か〕		聞香について
二十八	日新寺殿在家菩薩御詠歌	〔島津忠良〕		島津忠良の伊呂波歌
二十九	【ある人山庄に來りて】	諏訪左右衛門〔兼利〕	延宝九神無月上漸日（一六八一年）	琉球国王の庭園について

* 本文の前に作品名や説明書が有る和文はそれを記し、無い和文は本文冒頭の文字を【】で記した。作者名や年記があるものは、それぞれの欄に記し、年記の後に（ ）で西暦を付した。作者・年の表記が無いが推定できる場合は（ ）で記した。